

雁屋遺跡発掘調査概要・III

—府立四条畷高校理科棟（仮称）建築に伴う発掘調査—

1998. 3

大阪府教育委員会



はしがき

大阪府と奈良県を分ける生駒山地の西麓は扇状地が複合して南北に連なり、その上に遺跡が稠密に立地していること知られています。四條畷市に所在する雁屋遺跡もそのひとつで、これまでの調査で、弥生時代前期から近世に至る複合遺跡であることが確認されています。特に弥生時代には前期から後期までの各時期の遺構・遺物が大量に出土しており、北河内地域の中核的な集落のひとつと考えられています。

この遺跡の中心部にあたる府立四條畷高校内でも校舎の新・改築や埋設管設置に伴い発掘調査を実施し、弥生時代中期の方形周溝墓や後期の住居跡などを検出しています。

今回の調査でも、2基の方形周溝墓や当遺跡では2例目となる鳥形木製品をはじめ多くの資料を得ることができました。これらの成果は河内湖周辺の弥生時代集落の研究に大きく寄与できるものと確信しております。

最後になりましたが、調査に際しご協力をいただいた四條畷市教育委員会並びに地元の方々をはじめとする関係各位に厚く感謝するとともに、今後とも文化財保護行政にいっそうのご理解ご協力をお願い申し上げます。

平成11年3月

大阪府教育委員会
文化財保護課長 鹿野一美

例 言

1. 本書は四条畷市雁屋北町に所在する大阪府立四条畷高校校舎建替えに伴い、平成9・10年度に実施した雁屋遺跡の発掘調査概要報告書である。
2. 調査は大阪府教育委員会文化財保護課が技師阿部幸一を担当者として実施した。
3. 調査に際しては四條畷市教育委員会の野島稔・村上始氏をはじめ、寝屋川市教育委員会、大東市教育委員会、寝屋川市教育委員会、㈱大阪府文化財調査研究センターの職員やや弥生遺跡研究会会員の方々からご教示・ご指導いただいた。厚く感謝するしだいである。
4. 本書で用いた方位は国土座標第VI系に基づく座標北を示し、標高はT.P.+（東京湾標準潮位）で表示した。
また、遺構番号は3桁で表示し、西地区は001から、東地区は301から連続した番号を付している。
5. 本書の執筆は阿部が行なった。

目 次

はしがき

例 言

本 文 目 次

第1章	調査に至る経過.....	1
第2章	調査結果.....	5
第1節	層序.....	5
第2節	古墳時代から近世の遺構.....	6
第3節	弥生時代の遺構.....	8
西地区.....	8	
東地区.....	26	
第4節	小結.....	37

挿 図 目 次

第1図	これまでの主な調査地.....	2
第2図	四條畷高校内の調査地点概略図.....	3・4
第3図	東区北壁断面図.....	6
第4図	古墳時代～奈良時代の遺構.....	7
第5図	遺構全体図.....	9・10
第6図	002・003-SD上層土器出土状態平面図	11
第7図	002-SD下層（左）、003-SD下層（右）土器出土状態平面図.....	12
第8図	SB-1 平面図	13
第9図	025-SD北部土器出土状態平面図	14
第10図	025-SD (Y=-33076~33081) 土器出土状態平面図	15
第11図	025-SD土器溜り（上・中層）平面図、西地区遺構断面図	16
第12図	025-SD土器溜り（中・下層）平面図、断面図	17
第13図	025-SD出土土器実測図1	18
第14図	025-SD出土土器実測図2	19
第15図	025-SD土器溜り周辺出土土器実測図1	20
第16図	025-SD土器溜り周辺出土土器実測図2	21
第17図	035-SD平面図	23
第18図	039-SD土器出土状態平面図	24
第19図	100-SD平断面図	25

第20図	149—SD平断面図	25
第21図	第1号方形周溝墓主体部と地山面検出遺構平面図	26
第22図	1号主体部平断面図	27
第23図	第1号方形周溝墓周溝(314・315—SD)断面図、 314—SD南部土留め丸太出土状態平面図	28
第24図	第2号方形周溝墓平面図、1号主体部平断面図	29
第25図	第2号方形周溝墓 周溝平面図	30
第26図	327—SD平面図(後期)、下層(中期)土器出土状態平面図	32
第27図	328、329—SK平断面図	33
第28図	343—SD平面図	34
第29図	350—SK平断面図、弥生時代第3面検出遺構平面図	35
第30図	353—SK平断面図	36
第31図	357—SK平断面図	36
第32図	検出遺構断面図	38

図 版 目 次

西地区

- 図版1 上) SB-1(西から) 下) 044—SK(SB-1炉跡・南から)
 図版2 西地区全景 上) (東から) 下) (南から)
 図版3 上) 西地区全景(西から) 下) 025—SD(完掘時・西から)
 図版4 025—SD 上) 北部(西から) 下) 中央(東から)
 図版5 025—SD土器溜り 上) 中層全景 中) 中層拡大 下) 下層(南から)
 図版6 上) 149—SP(東から) 下) 035—SK(南から)
 図版7 100—SD 上) (北から) 下) (東から)
- 東地区
- 図版8 上) 310—SR(第2号方形周溝墓上面・西から) 下) 312—SR(西から)
 図版9 上) 北側遺構全景(西から) 下) 328—SK(南から)
 図版10 327—SD 上) 上層(弥生後期・南から) 下) 下層(弥生中期・南から)
 図版11 上) 313—SR、314—SD(南から) 下) 315—SD(北から)
 図版12 第1号方形周溝墓 上) 1号主体部(北から) 下) 地山面の遺構全景(北から)
 図版13 上) 315—SD断面(南から) 下) 314—SD断面(西から)
 図版14 第2号方形周溝墓 上) 全景(西から) 下) 2号主体部検出時(西から)
 図版15 第2号方形周溝墓 上) 南周溝(324—SD・南から) 下) 北周溝(326—SD・東から)
 図版16 357—SK 上) 烏形木製品出土状況(東から) 下) 全景(南から)
 図版17 上) 343—SD(北から) 下) 314—SD南側第3面の遺構(西から)

雁屋遺跡発掘調査概要・III

—府立四条駒高校理科棟（仮称）建築に伴う発掘調査—

第1章 調査に至る経過

雁屋遺跡は、四條駒市雁屋北町から江瀬美町、美田町にかけて所在する。遺跡の範囲は、四条駒高校を中心として東西500m、南北800m程度と考えられており、これまでの調査で弥生時代を中心に現代にまで残る条里地割など、各時代の遺構、遺物が検出されている。特に弥生時代の遺構、遺物は、前期から後期までの総ての時期に涉って検出されており、北河内地域を代表する弥生時代の遺跡の一つとして周知されている。

大阪府の東部を南北連なる生駒山地の西麓は、扇状地がよく発達しているが、この遺跡も生駒山地から西流する権現川や江瀬美川などの小河川が形成した複合扇状地の扇央部から扇端部にかけて立地している。この遺跡が知られる端緒となった、遺跡西部の日本道路公団職員住宅は標高5.5m前後で、弥生時代の遺構は、約2.5m下の標高3m付近で検出されている。また、遺跡の東部に当たる、府道四条駒停車場線の標高はT.P. 7~9mで、弥生時代の遺構面は約2m~3m下がった、T.P. 5.5~6.55m前後で検出される。

四条駒高校内では、これまで1986年、1993年、1995年の3回発掘調査が実施されている。

1986年（昭和61年）の調査は東館建設及び運動場内の排水管敷設工事に伴うものである。この調査では弥生時代中期の方形周溝墓3基、後期の土坑、溝、河道が検出されている。

また、排水管敷設工事に伴う調査は、幅約1mのトレンチ調査であるが、弥生時代後期の溝を9条、奈良時代の河川を1条検出している。

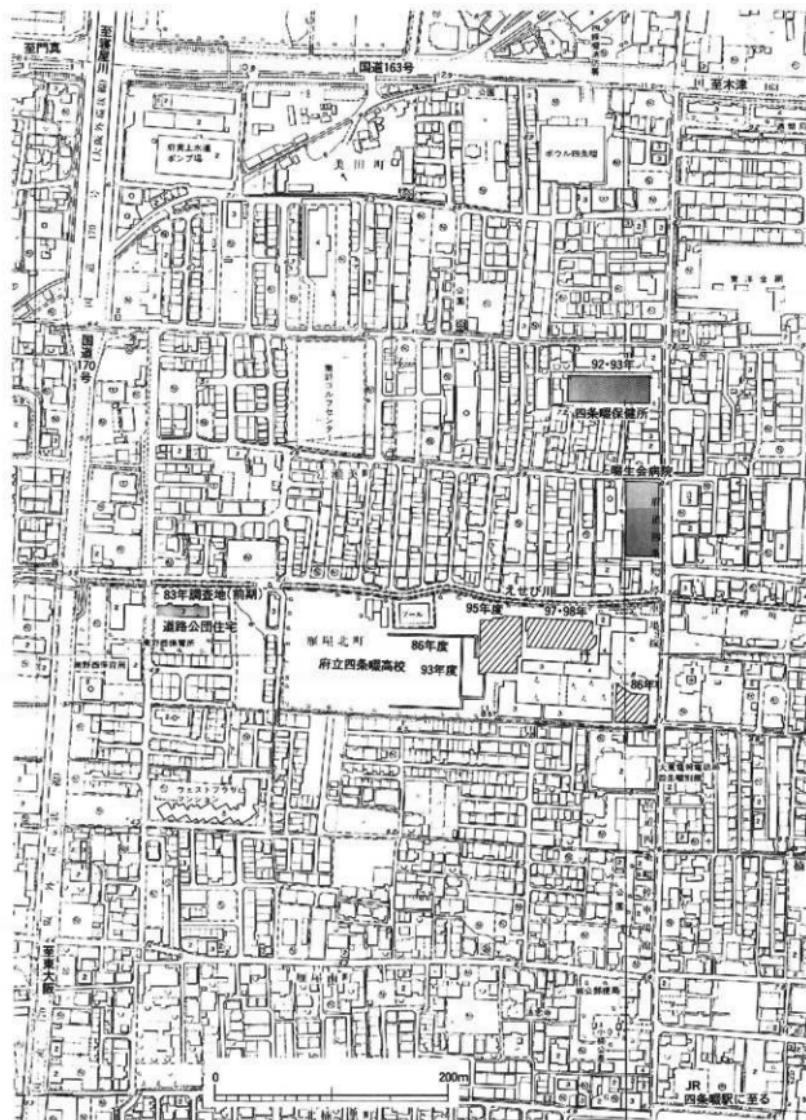
1993年（平成6年）の調査は、体育館建設に先立って実施された、運動場内の前記排水管の切換えに伴うもので、幅約1mのトレンチ調査であるが、弥生時代後期の溝3条と奈良時代頃の河道が検出されている。

1995年（平成8年）の調査は、体育館建替えに伴うもので、弥生時代後期の竪穴住居跡10棟、溝、土坑等の遺構とシャーマンを線刻したと見られる土器などが出土している。

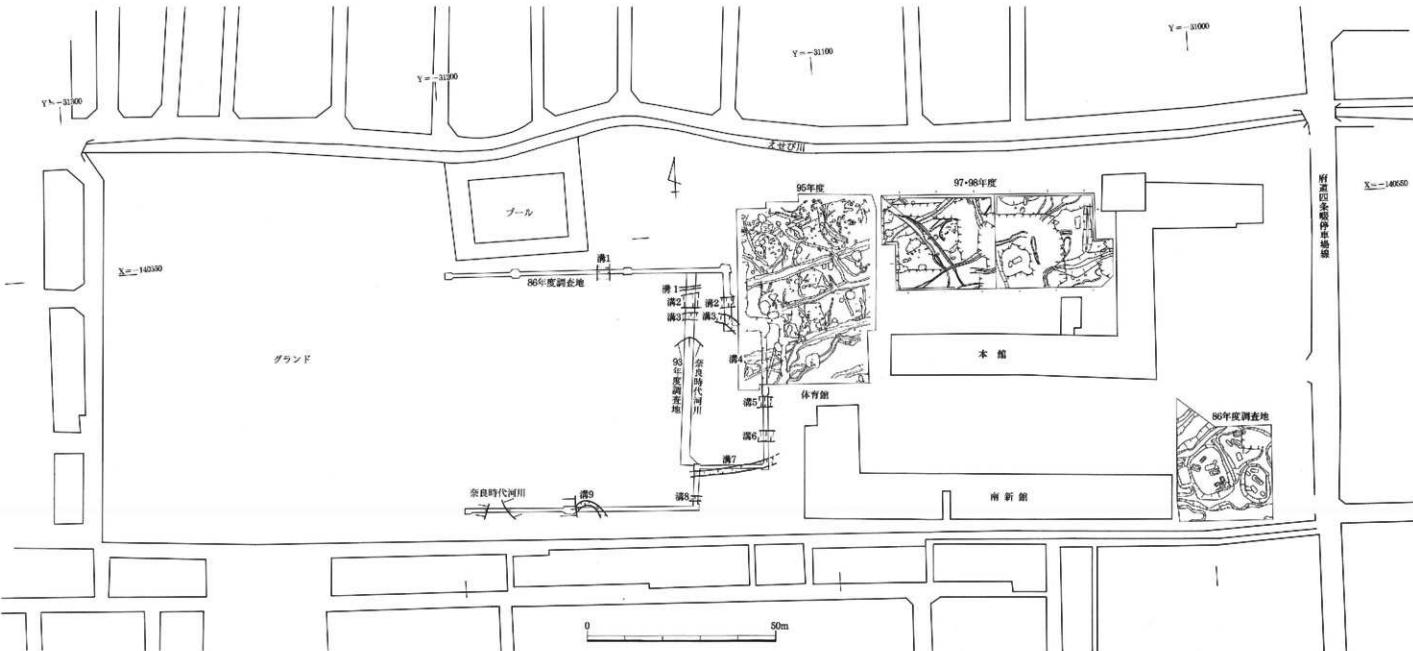
今回の調査は、昭和12年に建設され、老朽化が進んでいる本館、講堂の内、まず、講堂を解体し、新校舎（仮称理科棟）を建設することが計画されたため、発掘調査を実施することになった。調査は掘削上を学校外に持ち出せないため、調査区を2分割し、反転して掘削土を置く方法を探り、掘削深度が深いため、鋼矢板で調査区を囲って安全を図ることとした。この工事は、平成9年5月に着手し、西側半分から調査を始めた。その後、平成10年7月に東地区の調査を終え、平成10年8月に鋼矢板を引き抜き、旧状に戻して工事を完了した。

調査ではコンテナ（58×38×15cm）約250箱の遺物が出土した。整理作業を進めているが、今

回025-SD出土土器の一部を掲載した。復元作業は未着手であり、土器の写真も掲載していない。
それらを含め、今回掲載できなかった部分については本報告に期すこととした。



第1図 これまでの主な調査地



第2図 四條畷高校内の調査地点概略図

第2章 調査結果

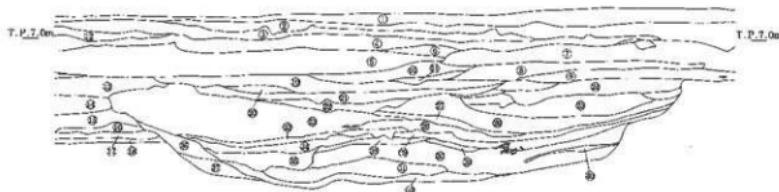
第1節 層序

調査地は生駒山系の西麓に発達する扇状地の末端部近くに位置し、自然地形は西南方向に緩やかに傾斜している。この辺りは旧河内国讚良郡に属し、昭和30年代まで条里地割が良好に残っていた。旧讚良郡では、河内郡との郡境を起点とし、北に数詞が増える条里が復元されている。四条畷市と大東市の市境は5、6条の里道である。府道四条畷停車場線は3里から1町東とされ、四条畷高校は6条2里と3里に跨って所在する。

高校は東西約300mで、明治の地籍図では3筆（東から後戸、西田、かのしろ）の水田で、西に1段づつ下がっているが、校舎建設やその後の増改築時、運動場整備の際に盛土、削平されている。現地表面は校舎部分では東側の道路（四條畷停車場線）とほぼ同じT.P.8.3m前後、運動場は約1m低く、T.P.7m前後を測る。

第3図は東地区北壁の断面図である。耕土以下が残っていた。

- 1) 5Y6/2 灰オリーブ土 中近世頃の耕作土である。20~30cmの厚さを測る。下面是T.P.7.3m前後である。
- 2) 7.5GY6/1 緑灰色土に鉄・マンガン沈着する層。この上面に耕作溝が残る。瓦器や須恵器の細片が出土する。
- 3) 10Y6/6, 5Y6/1 明黄褐色土と灰色土の混合層。全体に攪拌されたような層である。
- 4) 10YR7/2 にぶい黄橙色砂層
- 5) 5Y7/1 灰色砂層 4・5は洪水堆積層である。遺物は出土しなかったが、前回の調査から、奈良時代頃の洪水堆積であろう。
- 6) 10YR5/2 灰黄褐色微砂質土層 遺物を含まないので時期は特定できない。
- 7) 10YR6/1 褐灰色砂質土
- 8) 5Y3/1 オリーブ黒色粘土 弘生時代後期の包含層である。
- 9) 5Y6/1 灰色砂礫層 Y=-33040付近から東に分布する。5~10cmの厚さで、黒色に近い灰色の砂礫層、暗灰色粘土が混ざる。弘生時代後期の包含層である。
- 10) 2.5Y4/1と2.5Y3/1 黄灰色シルトと黒褐色粘質土の混合層
- 11) 2.5Y8/2 灰白色粗砂
- 12) 5YR5/8 明赤褐色土と灰色土の混ざった層。
- 13) 10YR7/1 灰白色砂層 鉄、マンガンが多量に沈着する
- 14) N3 暗灰色粘土層 14~18層は弘生中期以前の堆積層で、河道332-SRの地山となる。
- 15) N3 暗灰色砂質土層
- 16) 10YR3/1 黒褐色粗砂



第3図 東区北盤断面図 (S=1/60)

- | | |
|---|------------------------|
| 17) 10BG4/1 暗青灰色微砂 | 18) N2 灰色粘土 植物遺体を多く含む |
| 19) N3 暗灰色粘土 弥生時代後期の包含層である。8、9層に比べ遺物は少ない。 | |
| 20) 2.5Y6/1 黄灰色砂層 後期の遺物を包含する。洪水砂であろう。 | |
| 21) 7.5YR5/1 褐灰色粗砂～砂礫層 この層から下は弥生時代中期の河川(332-SR)堆積層である。主に砂層と植物遺体を多く含む灰色～黒褐色の粘土層からなる。 | |
| 22) 10YR5/1 褐灰色粗砂 | 23) N6 灰色砂層 |
| 24) 2.5Y5/2 暗灰黄色砂 | 25) 2.5Y7/4 浅黄色粗砂層 |
| 26) 10G6/1 緑灰色シルト | 27) 10BG3/1 青灰色粘土 |
| 28) 10BG3/1 青灰色粘土 灰白色砂をブロック状に含む | |
| 29) 5Y2/1 黒色粘土 | 30) N4 灰色土 |
| 31) N3 暗灰色粘土 | 32) N3 暗灰色粘土 植物遺体を多く含む |
| 33) N6 灰色粘土 | 34) 10YR3/1 黒褐色粘土 |
| 35) 10YR5/1 褐灰色粘土 植物遺体を多く含む | 36) 5Y4/1 灰色粘土 |
| 37) 10Y4/1 灰色粘土 植物遺体を含む | 38) 10YR4/2 灰黄褐色粗砂層 |
| 39) 10YR4/1 褐灰色粗砂層 | 40) 5Y4/1 灰色粗砂層 |

第2節 古墳時代から近世の遺構

調査区は講堂と体育館が建てられていた関係で中央部は削平、攪乱されており、古墳時代から近世までの遺構が残っていたのは全体の20%程度である。

検出した遺構は、耕作溝とそれよりやや幅の広い区画溝(条里溝)、足跡などである。調査地は譲良条里の一角にあり、学校前を南北に走る府道四條畷停車場線は3里から1町東の里道を拡幅した道であるが、溝の方向はこの里道にはほぼ沿っている。

図面・写真は割愛した。

古墳時代～奈良時代の遺構

3条の河道を検出した。001-SRと312-SRは流路の方向や堆積砂から同一の河道と考えられる。

001・312-SR

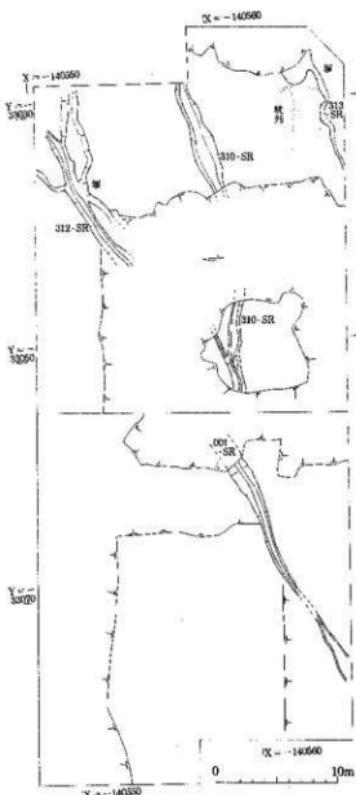
調査区の北東隅 ($X = -140547m$) から南南東方向に流れる河道である。上肩の幅は東調査区で 3 m 以上を測るが、西区では上部が体育館工事で削平されており、1.8 m 程度である。しかし、南側の断面では幅 10 数 m の砂堆層があり、オーバーフローが観察される。深さは東端では 2 m 以上を測り、弥生時代の遺構面や地山の砂質土を深く下刻している。西地区では深い下方浸食は見られない。東区東北端の底部断面は上に開く「コ」の字形を呈する。埋土は主に灰白色から白色の砂礫で黒褐色系の粘土をブロック状に含む。砂層内に当遺跡の東側の米崎遺跡の物と思われる古墳時代中期の土器と弥生土器を含む。また、 $X = -33035m$ ラインの右岸側上肩部で、流れに平行して打ち込まれた杭列と堆積砂の上に葉状の植物を束ねて敷き、その上に板材を置いた、堰状の遺構を確認した。板は建築部材を流用したものと考えられる

310-SR

東区の中央で検出した、東西に流れる河道である。西区では体育館建設時に削平されたためか、検出されない。幅は第 1 号方形周溝墓の上で 1 ~ 1.5 m、第 2 号方形周溝墓上で 0.8 ~ 1 m を測る。深さは 0.5 m 前後で、埋土は灰白色～白色の砂礫である。第 2 号周溝墓上の $X = -140562$ 、 $Y = -33052$ ライン上で北東方向からの小河道と合流する。同方位を示す 312-SR とは規模や下方浸食の深さが異なるので別の河川であろう。

313-SR

東区南端で検出した河道である。南側は調査区外に広がっているが、幅 2 m 以上、深さ 0.5 m 以上を測る。 $Y = -33028m$ 付近で半円形に蛇行し、淀みをつくる。この淀み付近の河道内や肩部でアトランダムに打ち込まれた杭と水流調節用とみられる板材、用途不明の加工木が出土して



第 4 図 古墳時代～奈良時代の遺構

いる。埋土は灰白色から黄灰色を示す砂礫層、灰黄色のシルト層で、拳大までの石を多く含んでいる。奈良時代頃までの土器が出土している。

第3節 弥生時代の遺構

雁屋遺跡の中心となる遺構である。95年度に実施した西隣の体育館建設時には後期の竪穴住居跡や土坑、溝を多数検出している。東区は搅乱が大きいと弥生時代中期に築かれた方形周溝墓や河道があり、後期の遺構は西区に比べて少ない。また、中期に開掘された溝が再利用されたもの（314-SD、327-SD）もある。検出面はT.P6.3m前後で東地区がやや高くなっている。調査順に従い西地区から、遺物が多く出土した遺構について略述する。

西地区的遺構

002・003-SD

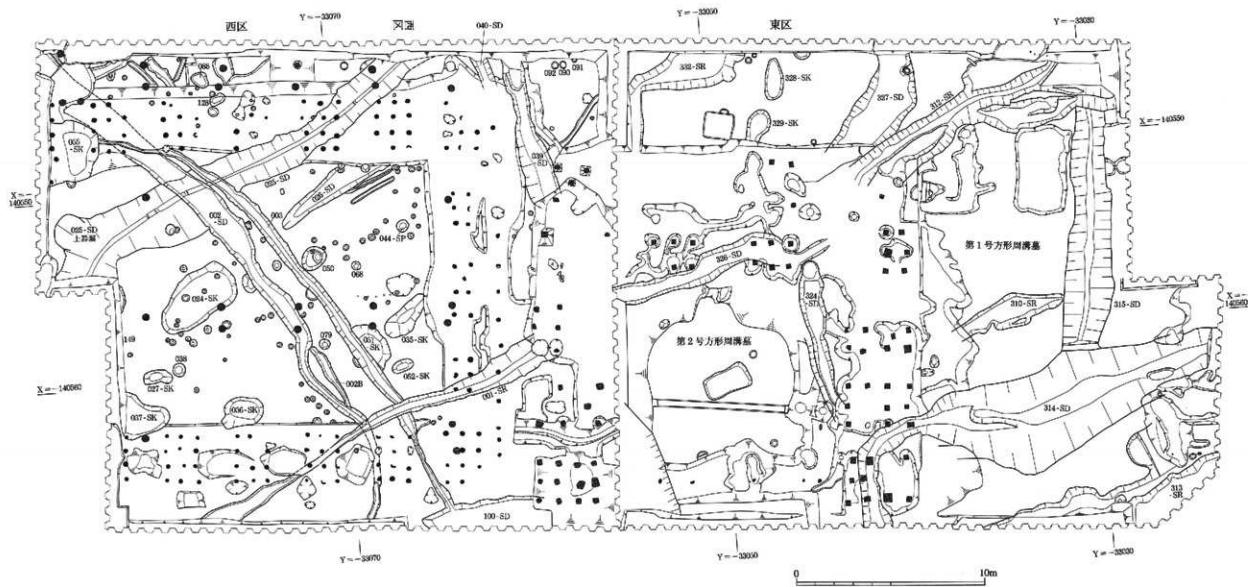
調査区の中央から西端にかけて、Y=-33070から-33080ラインに南東から北西に走る溝である。調査当初、8・9地区の弥生時代後期の包含層上層で、2~3m幅で撒き散らされたように分布する土器集積群として検出した。この土器を除去し、約10cm掘り下げたところ、2条の溝がやや離れて、平行して掘られていることを確認した。2条の溝の埋没後、包含層が形成されていく過程でも周りよりやや低く、水が溜まりやすかったのか、土器集積群の土層は周囲より黒ずみ、泥土に近かった。そこに土器を投棄したのであろう。

地表面での002-SDの規模は幅80~170cm、深さ25cm前後を測る。X=-140560付近では約4mの間2条に分かれている。断面では前後関係を判断できない。埋土は黒色粘質土である。土器集積群の下層でも底面に接して土器が出土している。

003-SDは調査区の西端で検出した溝で、055-SKから北東に向かい、002-SDの東で南に曲がって002-SDと平行し、100-SDに繋がる溝である。002-SDとの前後関係は重複部分が体育館建設時に削平され、逆台形に掘削された溝底を検出したのみであるため確認できなかった。溝は幅60~80cm、深さ25~30cmを測る。多数の土器が出土しているが、南側のX=-140558~140560付近では底面に接して、甕が数個体並んで置かれていた。

SB-1（竪穴住居1）

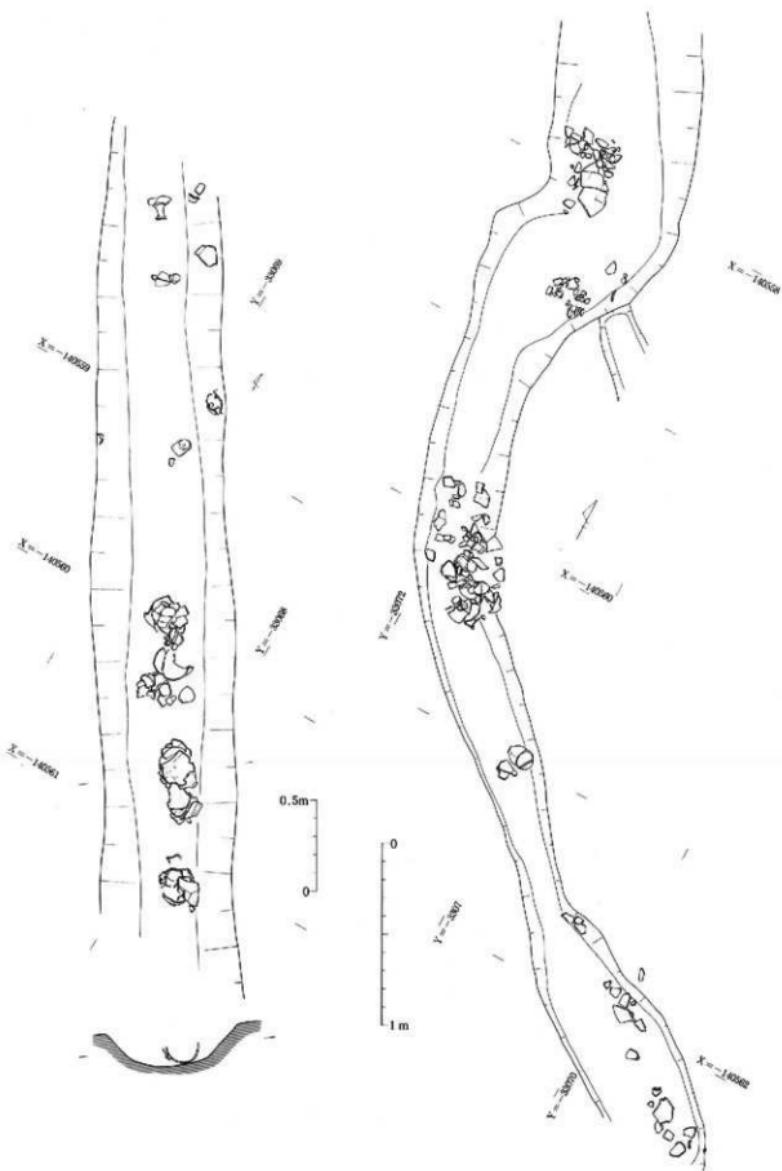
後期の包含層を約5cm掘り下げた位置で検出した竪穴住居跡である。検出面は黒色土と黄灰色砂の混ざった層で、この上に炭化物層が薄く広がり、暗褐色土で充填された半円形に廻る小溝（004-SD）が観察されたことから住居跡を確認した。壁溝とピット、炉跡を検出した。東側と南側は旧体育館建設時に削平されている。壁溝の形状から平面形は隅丸方形で、規模は径6~7m前後に復元できる。壁溝は完周しないが幅25~30cm、深さは5cm前後を測る。ピットは住居跡内で9コ検出したが、いずれも浅く、柱穴と断定できるものはない。炉跡（044-SP）は、歪な



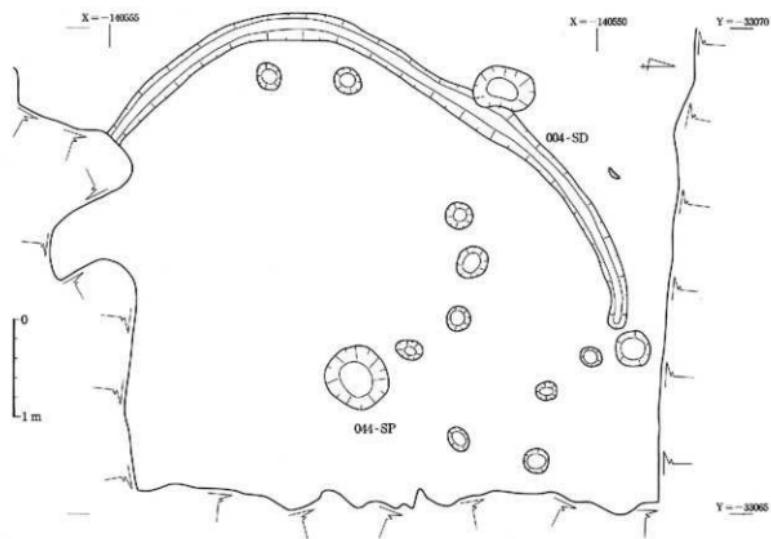
第5図 遺構全体図



第6図 002・003-SD上層土器出土状態平面図



第7図 002-SD下層（左）、003-SD下層（右）土器出土状態平面図



第8図 SB-1平面図

楕円形を呈し、径 $65 \times 60\text{cm}$ 、深さ 15cm を測る。埋土は炭化物混じりの黒灰色土で、検出面の上で観察される薄い炭化物層が帯状に連なっている。

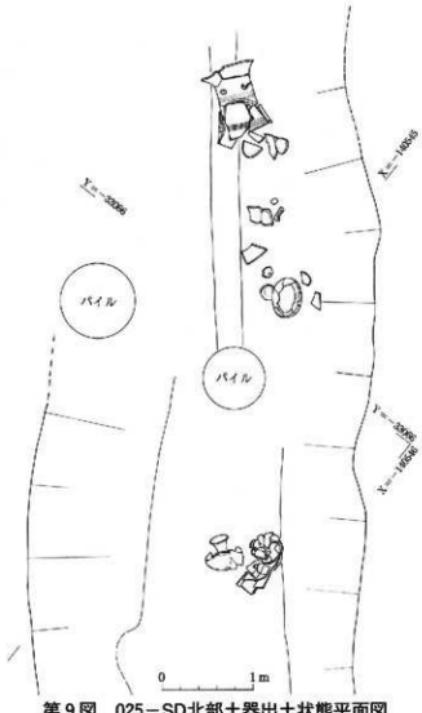
024-SK

$X = -140555$ 、 $Y = -33077$ の、002-SD西側で検出した大型の土坑である。長径 4.6m 、短径 2.4m の歪な楕円形を呈し、深さ約 20cm を測る。底面は比較的平らで、ピットが確認される。埋土は主に黒色土で、後期の土器が出土している。

025-SD

$Y = -33066$ ラインから $Y = -33084$ ラインまで東北東から西南西方向に掘られた溝で、西端では南に曲がっている。幅約 2m 、深さ $1.2 \sim 1.4\text{m}$ を測り、断面は「V」字形を呈する。底部は平坦ではなく、多くの人間で手分けして掘られたためか、数m毎に $15 \sim 20\text{cm}$ 深さが異なっている。埋土は暗灰色土や黄灰色土である。3ヶ所で断面を観察したが、東側の断面では、北側からの流入土が多く、北に盛土されていたと考えられる。西側の $Y = -33075$ から 33083m ラインでは地山の砂層（弥生時代中期以前の河道の砂）を掘削しているため、南からの流入砂が多い。

溝内からコンテナ約30箱の土器が出土している。遺物は、 $Y = -33072 \sim -33076$ の上層、 $Y = -33077 \sim -33079$ の中層（002・003-SDの下層）、 $Y = -33082 \sim -33084$ 上層の3ヶ所でまとまっ



第9図 025-SD北部土器出土状態平面図

後、椭円形のピットを掘り、炭化材などと投棄したものであろう。

025-SDと025-SD土器溜まりの土器

現在整理中であり、実測の終わった一部の土器を掲載した。また、未復元で、土器写真は撮影していない。写真図版は本報告で掲載する予定である。

第10、11図は溝内からの出土土器、第12、13図は西端で検出した土器溜まりとその周辺から出土した土器を掲載した。

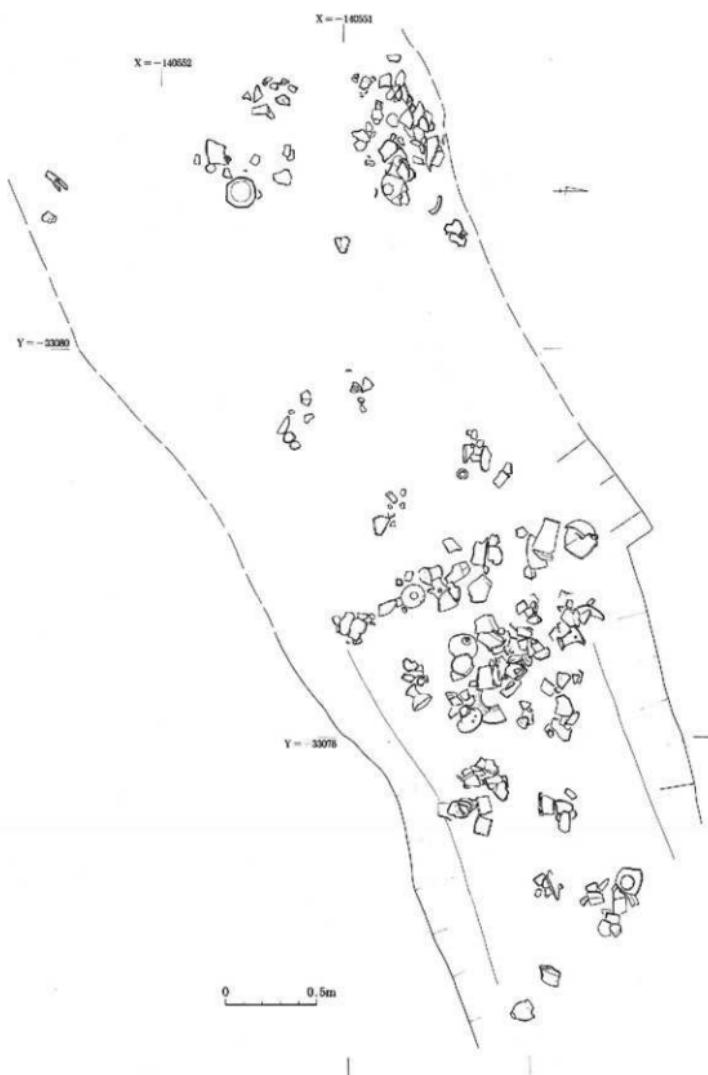
壺（1～6） 1～3は広口壺。斜め上に開き気味に立ち上がる頸部から大きく開く口頸縁部を作る。2は無紋、1は垂下する口縁部外面に波状紋と円形浮紋を持つ。3は口縁部に沈線と竹管の円形浮紋をつける。4は短頸壺、5、6は長径壺である。5は玉葱形の胴部に胴部高よりやや短かめの口頸部を作る。調整はヘラミガキである。6は球形の胴部と胴部高の約2/3の長さの口頸部を持つ。肩部に竹管紋を付ける。体部はハケメ調整である。

手焙り（7） 蔽（おおい）と口縁の一部を欠失するが、器形から手焙りである。蔽は受口状口縁の内側に貼り付ける古いタイプのものである。

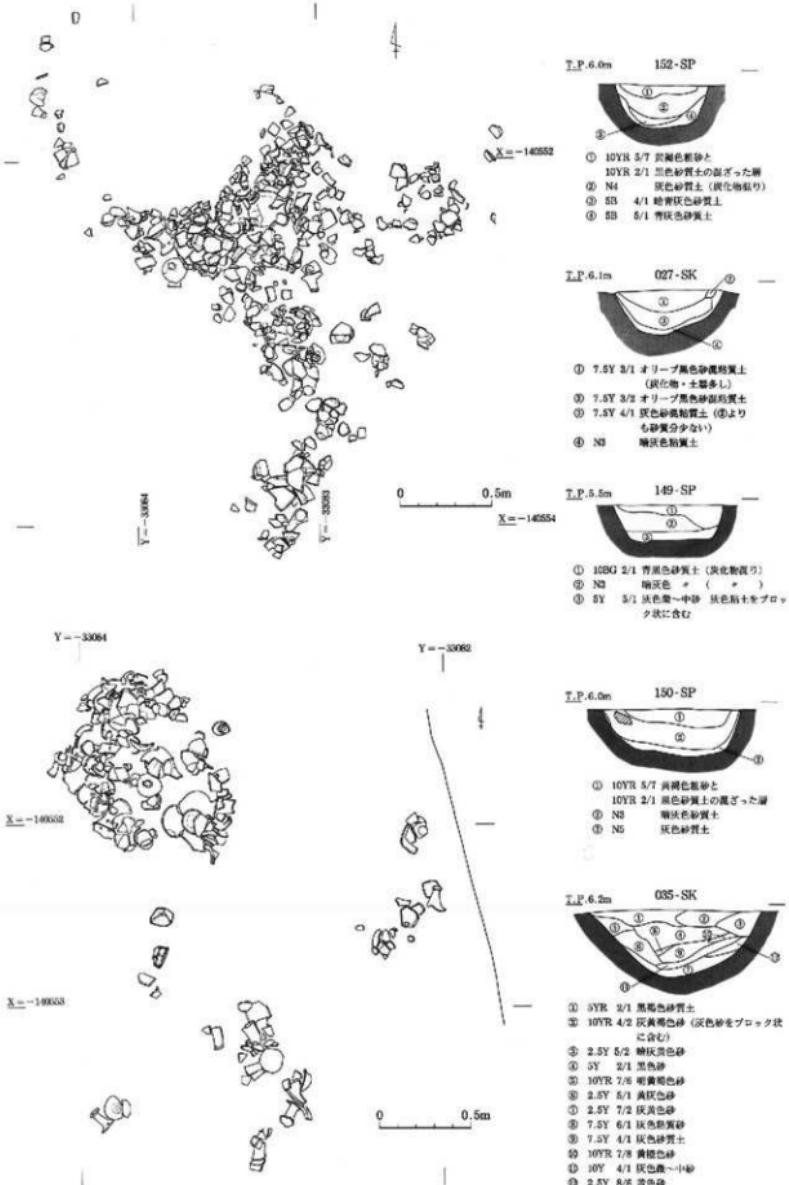
甕（8～12、15、16） 8～10は丸みを持った体部から「く」の字に形に外反する口縁部を持

て出土している。また、Y=-33066ラインの下層で口縁部と底部を欠失した器台や壺の口縁部が出土している。土器は中期末から後期前半頃のものが中心である。

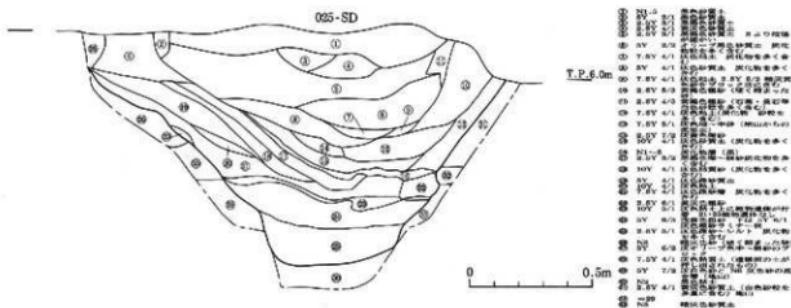
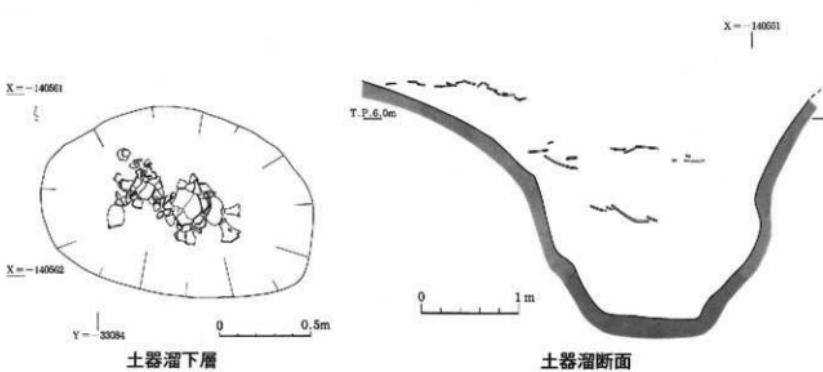
西端のX=-180552、Y=-33083付近で出土した土器は、調査当初、溝内にまとめて投棄されたものと考えた。しかし、出土状況を記録しながら徐々に土器を取り上げたところ、中層では土器と焼けた板材や炭が多く混ざっていた。更にこの炭化物、土器を取り上げたところ、溝の底部は南にカーブしており、溝の北肩側に椭円形の掘り鉢形を呈するピットの掘られていることが判った（025-SD土器溜まり）。溝上面は肩部の砂（地山面の河道堆積砂）が流れ、溝の埋積土と混合されており、上面ではピット（土器溜まり）の掘形はまったく確認できなかった。溝埋没



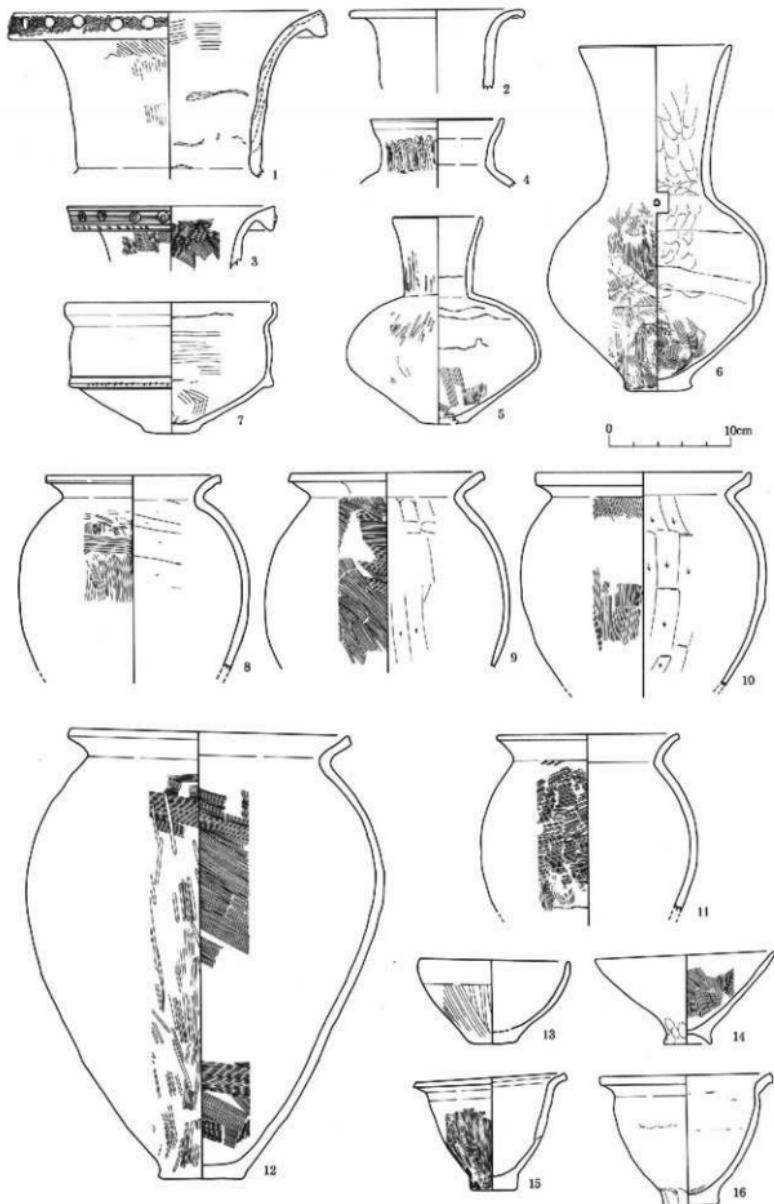
第10図 025-SD ($Y = -33076 \sim 33081$) 土器出土状態平面図



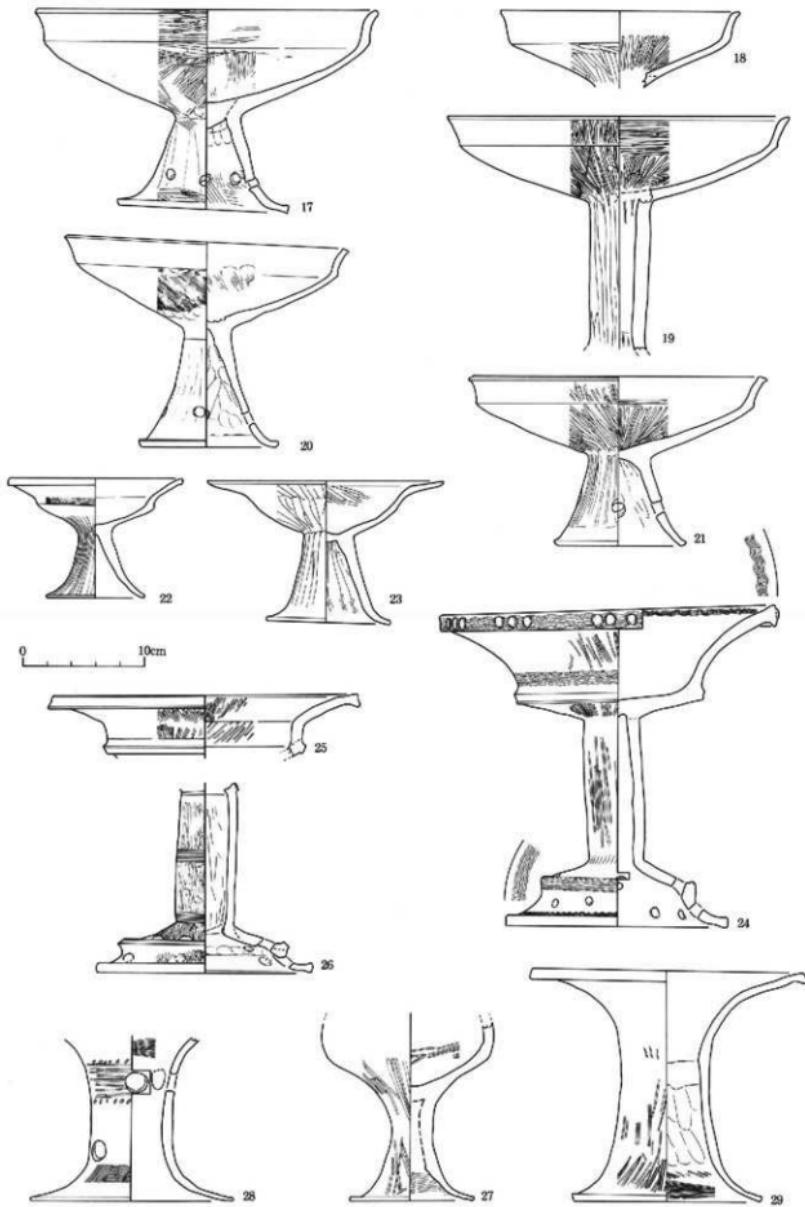
第11図 025-SD土器溜り（上・中層）平面図、西地区遺構断面図（S=1/60）



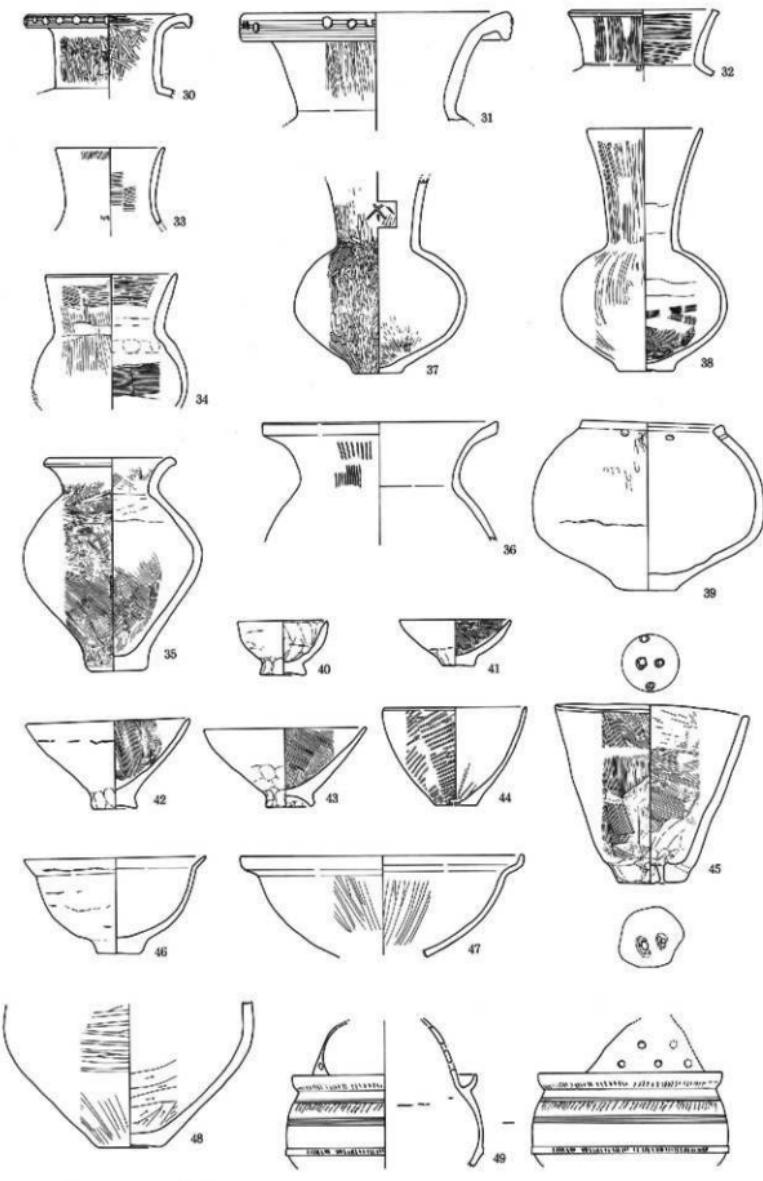
第12図 025-SD土器溜り（中・下層）平断面図、025-SD断面図



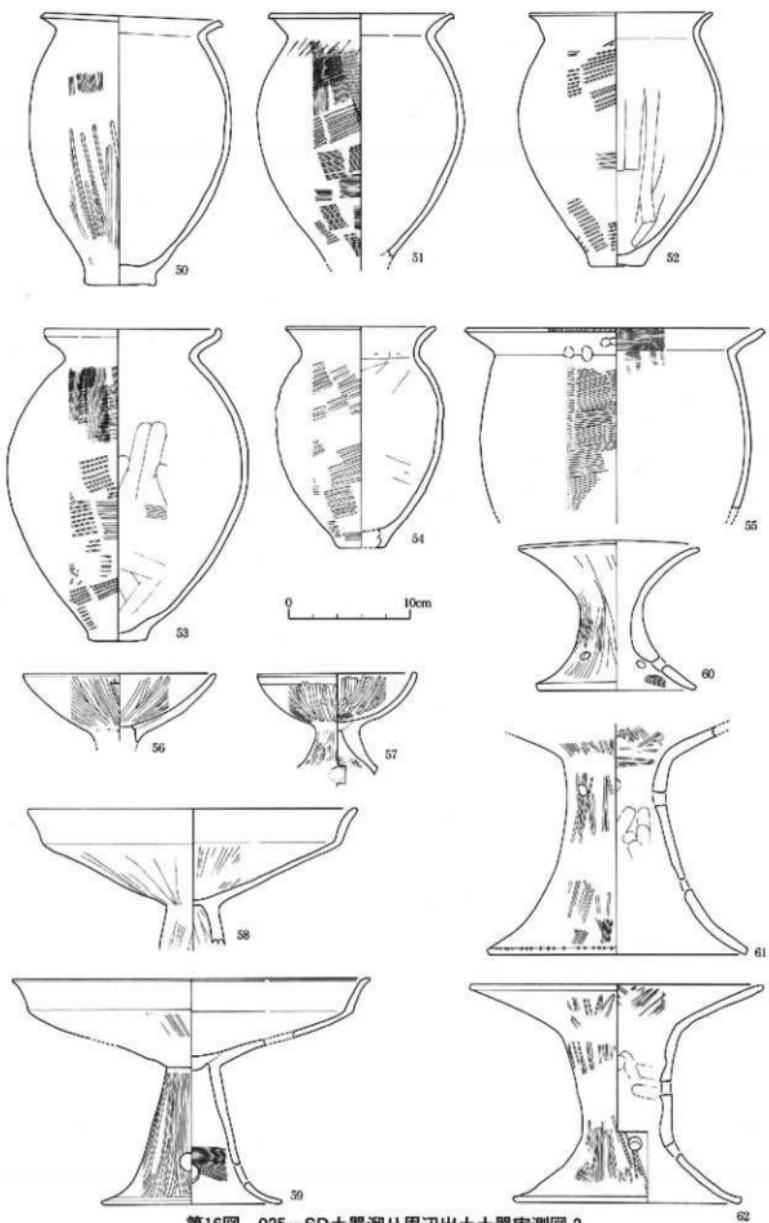
第13図 025-SD出土土器実測図 1



第14図 025-SD出土土器実測図 2



第15図 025-SD土器溜り周辺出土土器実測図1



第16図 025-SD土器溜り周辺出土土器実測図 2

つ。10は口縁を受口状につまみ上げる。外面をハケメ、内面は口縁近くまでヘラケズリを施す。11は外面にタタキ目を施し、底部はタタキのちハケメで消している。

12は器高36.5cmを測る中型の甕。内外面ともハケメで調整する。外面はその上からヘラミガキで調整するが粗雑である。15、16は倒錐形の小型甕、底部は分厚い。15は内外面ともハケメ。16はナデのみで仕上げ、粘土紐の跡が残る。

鉢（13、14）小型の鉢である。13は小碗形で、中期のもの、ヘラミガキの上から口縁部内外面を横ナデする。14は逆円錐形のもので、内面を蜘蛛の巣状のハケメで仕上げる。

高坏（17～26）逆ハの字形に開く坏部から短かく外反して立ち上がる口頸部を持つ（17～20）。

脚部は筒形のもの（19）とハの字形に短かく開くものがある。17、19は坏中央部を円盤充填で埋める。17、20、21は脚裾部に4、5箇所の透し穴を作る。24、25、26は有段口縁のもの。24は口縁端部に面を作り、波状紋と3個1対の円形浮紋を8箇所に飾る。坏と脚の段部、脚裾部、口縁内面にも波状紋を巡らす。外面はヘラミガキで調整するが、筒部下端の接合部はハケで押さえる。26は柱状部に2帯の多条沈線紋を巡らせ、外面を緻密なヘラミガキで仕上げる。25、26は同一個体かもしれない。22はこの有段高坏から派生したものか。坏の段外面に縦方向のハケ目が残る。脚部はラッパ状に開く。23は碗形の坏部に大きく外反する口縁部が付く。脚部はラッパ状に開く。22、23は他にあまり類例を見ない。27は口縁部を欠くが、台付き鉢であろう。

器台（28、29）鼓胴形で大きく開く口縁と脚部を持つものである。28は口縁部を欠く。柱状部に6、7条の沈線と列点紋で飾る。全体に摩耗しているが、裾部にハケ目が残る。29は口縁部が大きく開き、僅かに垂下する面を作る。外面や口縁内面はヘラミガキと見られるが全体に摩耗がすんでいる。

土器溜まり周辺の土器

壺（30～39、48）広口壺（30、31、35、36）は直立ないし開き気味に立ち上がる頸部から外反する口縁を持つもの。30、31は外反する口縁部外面に擬凹線、円形浮紋で飾る。35は胴部がやや張り出るもので、口頸部は外反し、口縁部に外傾する面を作る。胴部、頸部は内外面ともハケメでしあげる。36は口唇部を摘まむように強く横ナデする。短径壺（32～34）は球形の胴部から短く立ち上がる口頸部を持つ。32は密なヘラミガキ、33、34はハケ目で調整する。

長径壺（37、38）38は口頸部高と体部高がほぼ同じである。外面を密なヘラミガキで調整する。37は頸部にヘラ描きの記号をつける。

39は無頸壺で肩部から丸く張り出す。48は壺胴部で、内面をヘラケズリする。

鉢（40～47）40は手捏ねで指押さえが明瞭に残る。41は小碗形のもの。42、43は逆円錐台形のもの。外面はナデ、内面は細かいハケメで調整する。44は有孔鉢で、タタキ目を残す。45は逆円錐台形の有口鉢。いびつな作りの土器で、器壁は厚みがあり、内外面ともハケメ調整する。底面に内側から4ヶ所焼成後に穴を穿っているが、2箇所は未穿孔である。

手焙り (49) 底部と蓋の頂部を欠く。蓋は受口状口縁の内側から立ち上がり、透かし孔を穿つ。口縁や肩部、胴下端の凸帯に櫛の列点紋を描く。

甕 (50~55) 55は外面をハケメとヘラミガキ、内面は板ナデで調整する。51, 53はタタキの後、肩部をハケメで調整するもの。52は胴部が強く張らず、口縁を丸く外反させる。内面は板ナデである。54も内面は板ナデであるが、頸部にヘラケズリが残っており、ヘラケズリののち板ナデで調整したのであろう。55は口径が腹径を上回るもの。口縁外面に刻み目をつける。

高坏 (56~59) 56, 57は碗に脚をつけたもの。坏部は内外面とも密なヘラミガキで調整する。58, 59は皿形坏部のもの、口縁部の外反度は小さい。脚から坏を連續成形し、円盤充填で埋める。59の裾部は屈曲気味に開く。

器台 (60~62) 鼓胴形のもので、受部、裾部とも大きく開く。60は器高12cm、口径15cmを測る小型のもの。筒下部の器壁が厚く、内面の調整が粗雑である。61は筒から裾部が開き気味に連続する。裾下端に刻み目をつける。62は開き気味に立ち上がる筒部に大きく外反する受部をつける。受部端は丸みを持つ。内外面とも密なヘラミガキで調整する。

035-SK

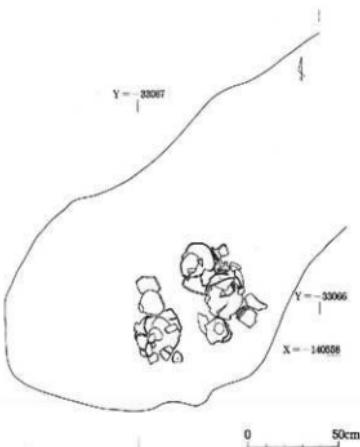
X = -140557, Y = -33067ラインで検出した土坑。東端は削平されているが、長径約3m、短径1.1mで、平面形は梢円形を呈する。河道埋積後の砂層をベースとするため掘形は捕鉢形で深さは40cmを測る。埋土は黒色～灰色の砂や砂質土で、土坑東側で土器が固まって出土している。

039-SD

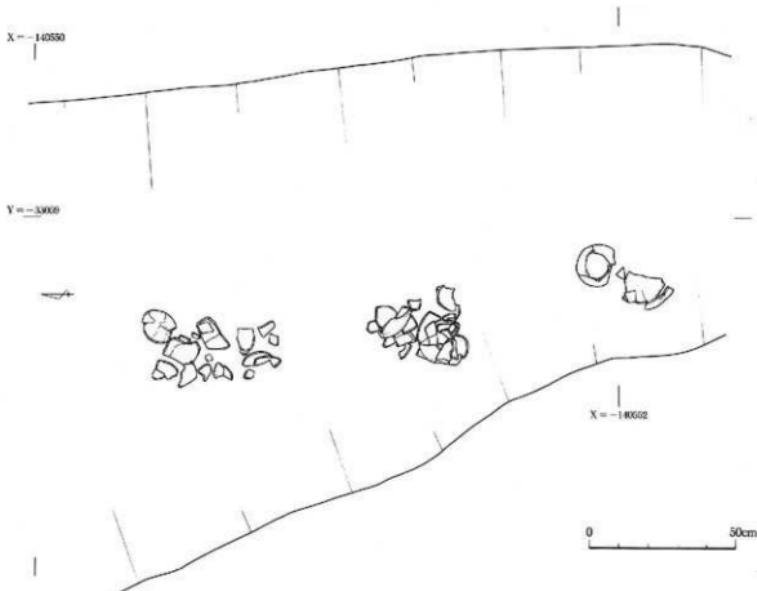
X = -140545~-140553, Y = -33059で検出した溝で、南流する。遺構全体の上部は削平されている。また、X = -140553より南側は体育館の基礎工事の際に破壊されており、底部の深さ約20~35cm分のみを検出した。検出幅は1~1.8mを測る。埋土は主に暗灰色から黒色の粘質土である。溝の方向から、後述する343-SDと同一の溝と考えられる。

051-SK

X = -140559, Y = -33068で検出した土坑である。西側は003-SDに切られる。南北に長い梢円形を呈し、長径2.8m、短径1.2m以上、深さ20cmを測る。掘形は逆台形で、底面は平坦である。埋土は主に炭化物を含んだ黒色土で、土器片を多く検出している。



第17図 035-SD平面図



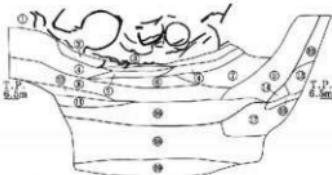
第18図 039-SD土器出土状態平面図

055-SK

$X = -140548$ 、 $Y = -33083$ で検出した土坑である。西側は調査範囲外であるが、南北3m、東西2.5m以上、深さ60cmを測る。埋土は黒色～暗灰色粘質土で多量の土器が出土している。この遺構付近は、体育馆工事の際に布堀りされ、003-SD上層が削平されていたことから前後関係を判断することはできない。

100-SD

調査区南端、 $X = -140568$ 、 $Y = -33060 \sim -33066$ ラインで検出した溝である。調査着手時、 $Y = -33060$ 付近の搅乱土に後期の土器が多量に混入しており、さらに、鋼矢板際の断面を整形した際、土器の積み重なっていることが観察された。001-SRの砂礫層を取り除いたところ、薄い縞状に砂と黒色砂質土が互層堆積し、刃を欠いた鋤身が土器層の上に乗っていた。砂、砂質土の下は黒色～暗灰色の粘質土であるが、多数の土器が重なり、土器の隙間に泥土が滲入しているような状況であった。溝の北肩は旧体育馆工事の影響で約20cm削平され、検出面のレベルはTP 5.9m前後である。南肩は矢板際でわずかに残っていた程度であるが、幅1.2m前後、深さ1m程度を測る。土器は中上層に集中し、下層では少なかったことから、土砂の埋積が進んだ段階で投入されたものであろう。

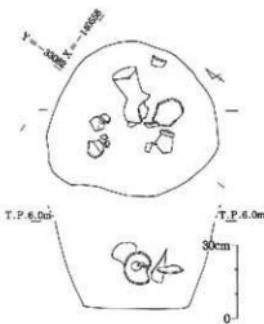


- | | | | |
|---------|------------------------|------------|------------|
| ◎ 1.3V | 上: 黒灰色土 (上層 黒色砂質土) | ◎ X3 | 黒灰色シルト |
| ◎ 1.2V | 上: オリーブ色砂質土 | ◎ X2 | 泥炭土 (少し褐色) |
| ◎ 1.2V | 下: オリーブ色砂質土 (下: 黒色土) | ◎ X1 | 褐色土 |
| ◎ ET | 黒灰色土 | ◎ S2 | 黒灰色土 |
| ◎ X2 | 黒灰色土 | ◎ S3 | 褐色砂質土質土 |
| ◎ 7.3T | 下: オリーブ色砂質土 (淡色砂少なし) | ◎ S2 | 黒灰色土 |
| ◎ 1.3V | 上: オリーブ色砂質土 (下: 黒色土質土) | ◎ T.P. 4.1 | 褐色砂質土 |
| よもぎ柄少なし | | ◎ T.P. 3.1 | 褐色砂質土 |
| ◎ X2 | 褐色砂質土質土 | ◎ T.P. 3.1 | 褐色砂質土 |
| ◎ ET | 下: オリーブ色砂質土 | ◎ X3 | 褐色砂質土 |

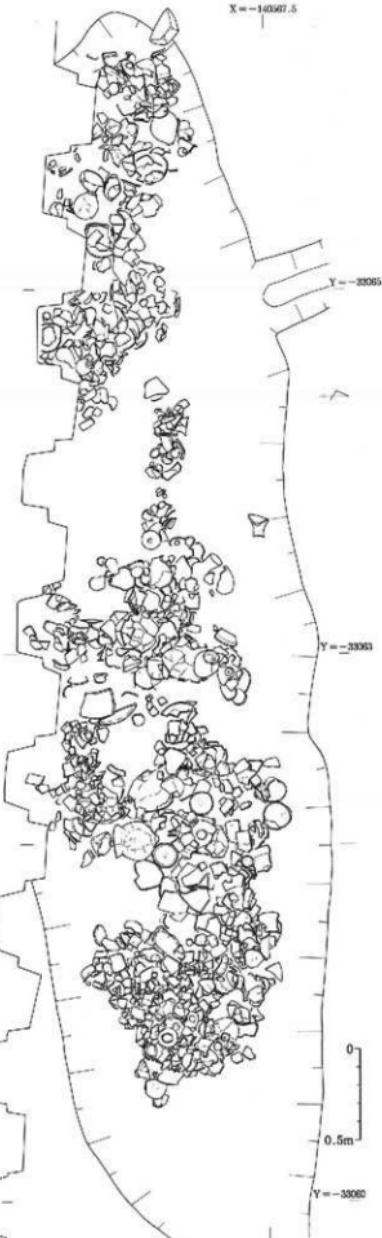
第19図 100-SD断面 (S=1/40)

149-SP

調査区の西端、X=-140558、Y=-33082付近で検出したピットである。矢板際に設定した土層観察断面内に取り込まれていたため、断面除去後にピットの存在を確認した。検出面 (T.P. 5.45m、後期造構面より65cm下) でのピットの大きさは、径約70cmの歪な円形を呈する。埋土は灰色砂、青黒色砂質土である。砂層に達しているので井戸であろう。後期の長頸壺や高杯が出土している。



第20図 149-SD断面図



第19図 100-SD平面図

東区の遺構

東区は、講堂建設時に幅7m、深さ2.5mの「コ」字形に布掘りされている。また、昭和12年頃の鉄筋コンクリート造り校舎が非常に頑丈な造作であったことから解体時にも基礎の周りを広く掘らざるを得なかった。その結果、調査区の40%近くが搅乱されることとなった。

検出した遺構としては、弥生時代中期の方形周溝墓2基、中期から後期まで利用されていた溝、中期の河道、土坑、ピット、後期の土坑などがある。

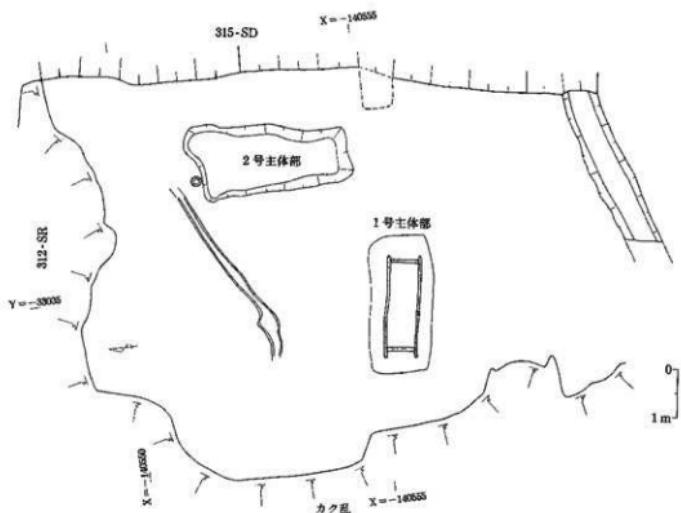
第1号方形周溝墓

$X = -140550 \sim -140560$ $Y = -33030 \sim -33040$ で検出した。古墳時代以後の搅乱（耕作）のため盛土が認識できず、主体部を検出するまで墓とは判断できなかった。

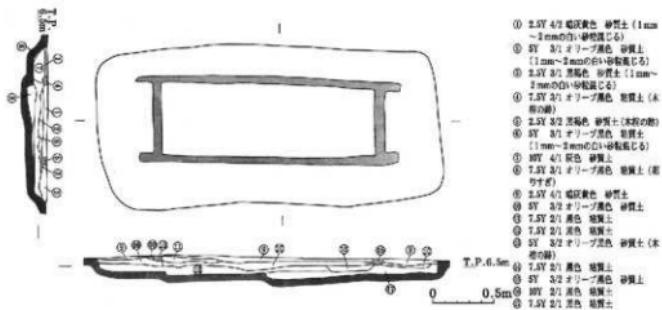
南側は幅広の314-SD、東側はV字溝の315-SDで画される。西側は講堂建設時に破壊されている。北側は奈良時代頃の河道312-SRに削られている。この河道は周溝跡の比較的柔らかい土層を浸食して流路を形成したのであろう。現況での周溝墓の規模は、溝の内側で東西7m、南北13m以上を測る。

1号主体部

灰色土中で検出した。上部は古墳時代以後の耕作により攪拌されており、主体部の掘形と、側板、小口板、底板の痕跡を確認した。人骨は残っていない。主体部は長軸を東西におき、長さ2.8m、幅1.3mを測る。②層のオリーブ黒色土が底板の痕跡と考えられる。埋土は灰色から黒色



第21図 第1号方形周溝墓主体部と地山面検出遺構平面図



第22図 1号主体部平断面図

系の砂質土で砂粒を多く含んでいる。

2号主体部

$X = -140553$ 、 $Y = -33033$ 付近で、1号主体検出後T.P.6.5m前後で検出した。歪な方形の掘形で、主軸を南北に置く。長辺3.4m、短辺1.6mを測る。埋土は灰黄色砂で、深さは約10cmを測る。この遺構は、周溝墓 築造以前の洪水堆積砂の可能性もあるが、主体部としておく。

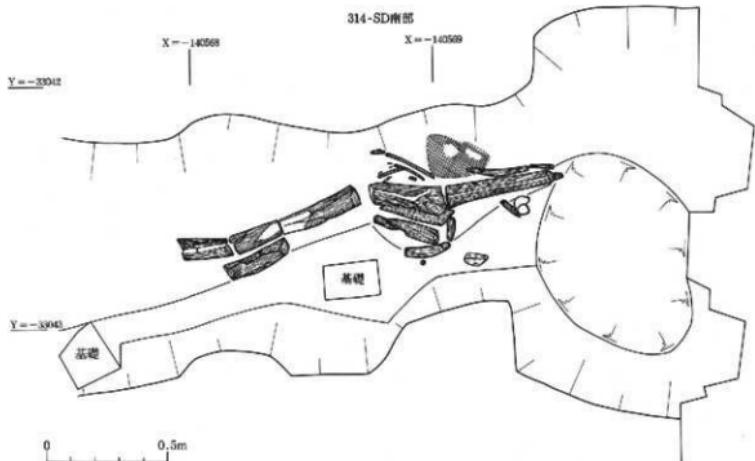
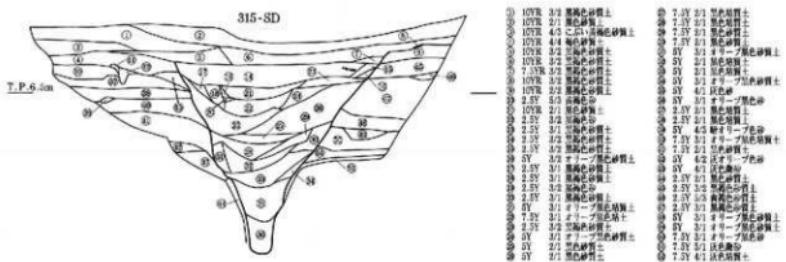
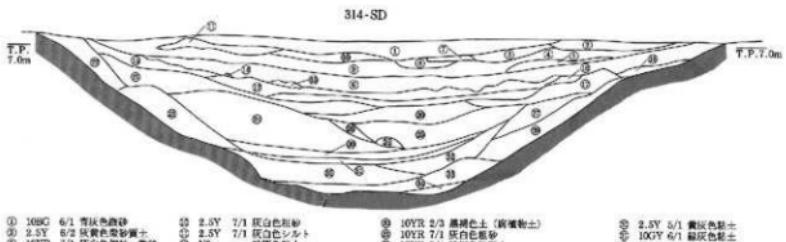
314-SD

東西に流路を持つ溝で、第1号方形周溝墓の南周溝となっている。東側は浄化槽の、西側は講堂の建設、解体時に破壊されている。溝の掘削時期は中期であるが、後期まで埋没しきらないで残っており、後期に浅く掘り広げられた可能性が高い。溝の幅は、第一号方形周溝墓部分で5.7mを測る。しかし、東端矢板際断面では幅約2.5mと狭くなっている。浅い皿状を呈する6層（褐灰色砂混り粘土）上面で足跡と後期の土器が多く出土している。掘削断面は、周溝墓部分では掘り鉢形、東端ではU字形の断面を呈する。深さ1.3m前後を測る。

$Y = -33040$ ラインから西側は擾乱されていたが、やや深くなった溝底が残っており、この底部を追いかけると、 $Y = -33043$ 付近で直角に南に曲がっていることが確認できた。また、講堂の基礎により損傷を受けていたが土留め用と見られる丸太を3段に積んだ施設と、竹を細く裂いて網代状に組んだ笊状の遺物を確認している。遺物としては中期の大型甕の破片などが出土しているが量は少ない。

315-SD

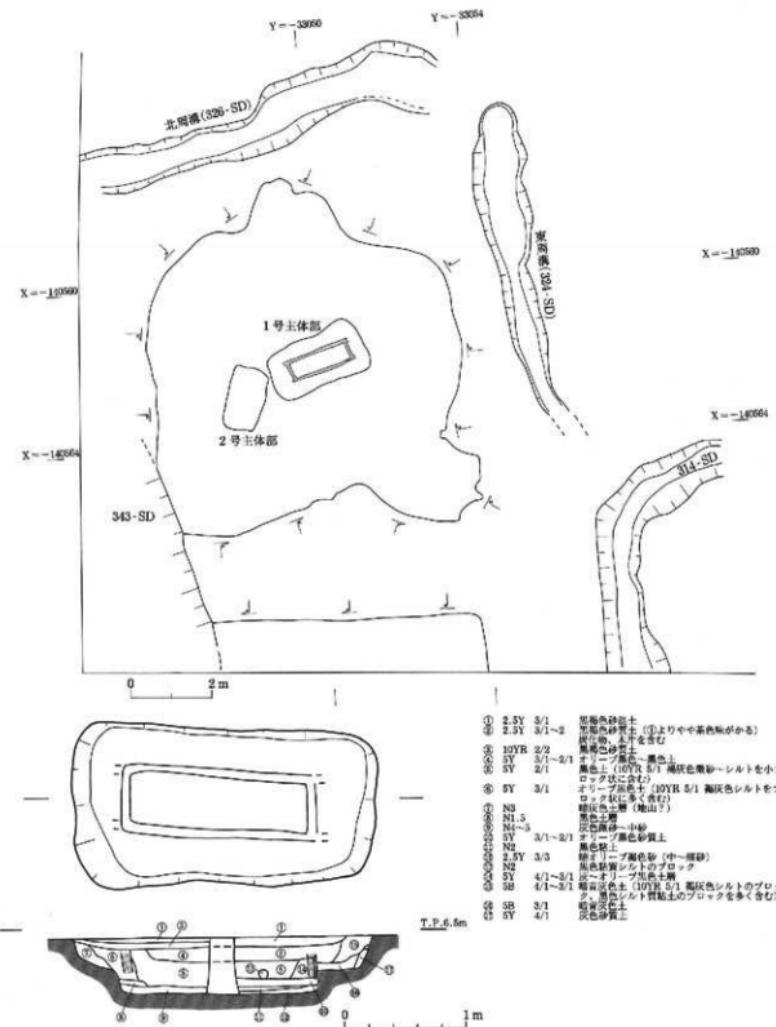
$Y = -33030$ ラインで314-SDから北に掘られた溝である。幅2~2.5m、深さはもっとも深いところで1.5mを測り、周溝としては極端に深いV字溝である。314-SDとの合流部分は極端に浅くなり、馬の背状になっている。陸橋部ではなく、314-SDに水流があったため、開削できなかつたと推定される。埋土は主に青灰色土、暗灰色土で、中期の土器片が出土している。



第23図 第1号方形周溝墓周溝（314・315-SD）断面図、314-SD南部土留め丸太出土状態平面図

第2号方形周溝墓

X = -140550, Y = -33050付近で検出した。戦前の講堂建設時に幸運にも講堂の床面に当たり、基礎が打たれなかったことから残った遺構である。講堂建設時に広く段掘りされ、北側と東側周溝は溝底部のみが残り、墳丘の法面は搅乱されている。南側は壁面工事で約5m幅で東西に掘削されており、規模は確認できない。西側は弥生後期の溝（343-SD）と工事で削られている。



第24図 第2号方形周溝墓平面図、1号主体部断面図

また、古墳時代以後の河道310-SRはこの封土を浸食して西流する。東西方向に設定した断面では、蒲鉾形を呈する封土の上面は橙色系の砂質土で、数cm程度の厚さであるが堅く締まっている。その下は青灰色系粘質土が盛土されている。

現況での墳丘部の大きさは南北9m、東西8mを測る。墳丘部では2基の主体部を確認した。

1号主体部

X = -140562、Y = -33050で検出した。主軸は北周溝とほぼ同方位で、E-20°-Nを示す。検出面(TP6.4m)での掘形は2.4m × 1.3mを測る。埋土は黒褐色からオリーブ黒色土で、封土よりやや黒みが強い。平面や断面で木棺の痕跡(暗灰色土)確認したが明瞭ではない。木棺の大きさは小口間が1.3m、側板間が0.5mを測る。底板は確認できなかった。

2号主体部

1号主体の調査を終え、青灰色土を10cm掘り下げ、TP6.3mレベルで検出した。埋土は周囲よりやや柔らかい暗青灰色土である。方形プランを呈することから主体部と判断した。掘形の長軸はN-19°-Eで、大きさは1.2m × 0.75mを測る。検出面から墓坑底までの深さ10cm度であった。木棺等の痕跡は確認できなかった。

周溝は北と東の周溝底のみを検出した。

324-SD

東周溝である。X = -140556、Y = -33045から東に振って南に掘削される。底部の幅は50~70cm測る。底面のレベルは北端が弥生時代以前の河道堆積の砂層に達しており、TP5.3m、南は徐々に浅くなり、X = -140663付近では5.7m前後である。314-SDと繋がっていたことも考えられるが、講堂建設時に搅乱され、確認できない。溝底で中期の壺や甕を検出したが、いずれも、封土上から転落したものと見られる。

326-SD

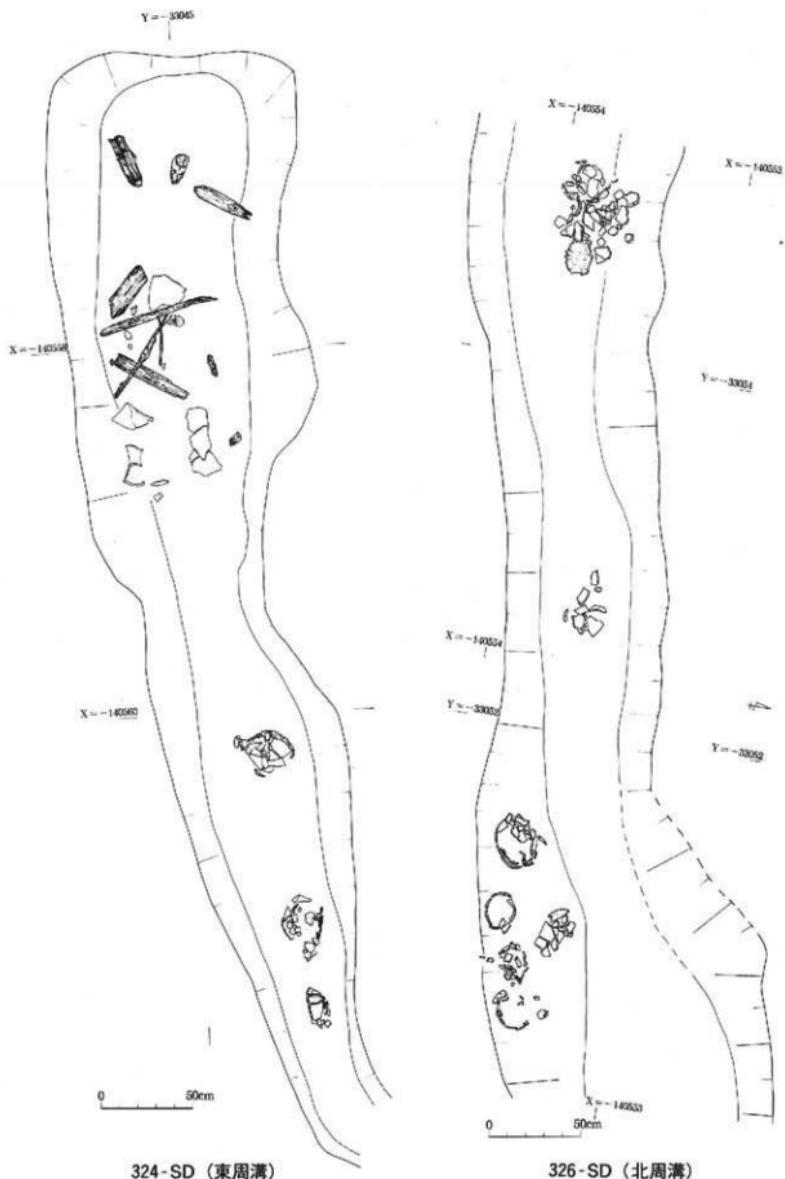
北周溝である。X = -140555、Y = -33045ラインから西南西に掘削される。底面の幅は60~100cm測る。底面のレベルは東端で5.5m、西端で5.7mを測る。この溝の底から40cm上がった、マウンド据部(X = -140556ライン)で鉢や壺が据えられた状態で検出している。土器は全て土圧により碎かれていた。

西端の土器は後期のものである。溝底からは約20cm浮いていて、小さく割れている。埋葬に伴う供獻土器か否か、判断できない。

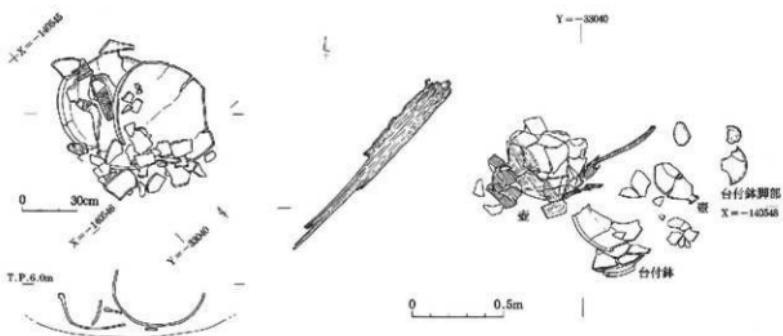
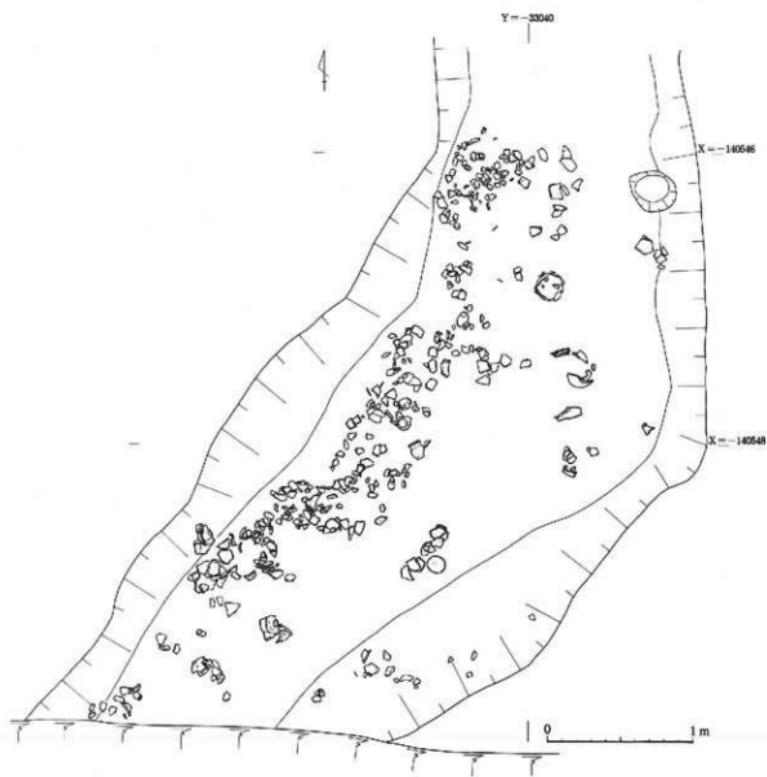
327-SD

Y = -33040ラインの北端で検出した溝である。この溝も中期に開削され、その後、土砂の堆積があまり進まず、後期まで残っていた遺構で、灰色粘土と灰白色砂の混合層上面に、後期の土器溜りがある。検出状態は、割れた土器を撒き散らしたような状態で、破片化したものが多い。下層からの中期の土器も混入している。

中層以下の埋土は、主に暗灰色系の粘質土であるが、矢板際のX = -140545.5で中期の壺と大



第25図 第2号方形周溝墓 周溝平面図



第26図 327-SD平面図（後期）と下層（中期）土器出土状態平面図

型の鉢が重なって出土した。壺は廉状紋に円形浮紋を貼りつけた大型の細頸壺で、いわゆる、河内の土器である。口頸部と胴部の約1/2が破碎されている。鉢も廉状紋の河内の土器で、検出時には壺が上に乗っているような状態であった。鉢を蓋として被せていたが、滑り落ちた際に反転したと考えられる。細頸壺を使った例は知られていないが、土器棺の可能性が高い。また、この壺から約2.5m南のX=-140548付近で、完形の細頸壺と壺、甕、台付き鉢、板材などを検出している。細頸壺は白っぽい胎土の口頸部に多条凹線と櫛描紋をもつ浜津系の土器である。また、台付き鉢は廉状紋を持つ河内の土器である。

328-SK

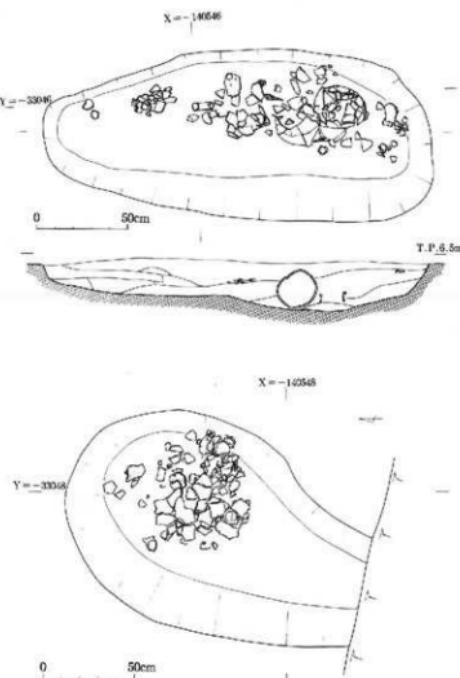
X=-140546、Y=-33046で検出した後期の土坑である。南北に細長い橢円形を呈するが、南端は丸く脹らんでいる。長径210cm、短径95cm、検出面からの深さ25cmを測る。埋土は砂礫を多く含んだ黒色からオリーブ色の粘質土である。遺物は中央から東に寄った位置で、完形の甕や高杯、壺等が並べられた状態で出土している。土坑の大きさや土器の埋置状態から土壤墓の供獻土器とも考えられるが、骨等は確認できなかった。

329-SK

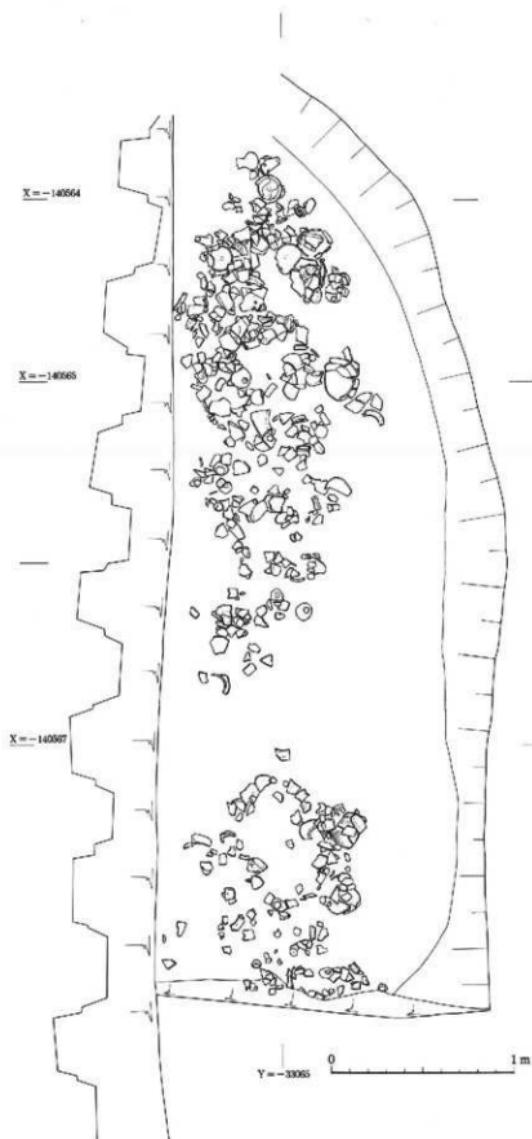
X=-140549、Y=-33047付近で検出した遺構である。南は搅乱されているが、橢円に近い形状の土坑である。短径120cm、長径は170cm以上、深さ15cmで、浅い皿状を呈する。埋土は黒色砂質土である。土坑内から土器片が固まって出土したが、完形に復元できる個体はなかった。

343-SD

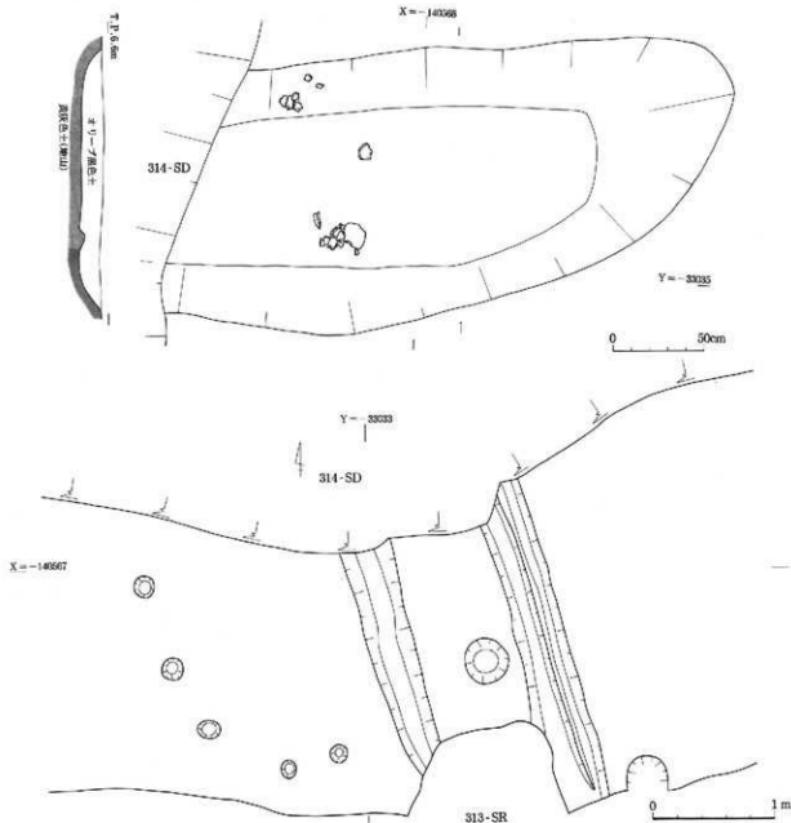
第2号方形周溝墓の西側で検出した南南東から北北西に流れる溝である。講堂工事や発掘調査用鋼矢板を打設する際に搅乱されており、土器溜りの存在で遺構を確認した。第2号方形周溝墓の西を削って開削されたと考えられるが、西側周溝を利用した溝の可能性もある。流路の方向から、039-SDに繋がるものと考えられる。土器溜りは溝底面から10~20cm程度上で検出している。



第27図 328、329-SK平面図



第28図 343-SD平面図



第29図 350-SK平断面図（上）、弥生時代第3面（下）検出遺構平面図

矢板際で土層が搅乱されており、断面図を作成することはできなかった。

350-SK

314-SDの下層、X = -140567、Y = -33034付近で検出した、314-SDより古い土坑である。検出面はT.P.6.6m前後である。検出面の土はやや黒ずんだ黄灰色土である。土坑は、北を314-SDに削られているが、現存で南北2.8m以上、東西1.5mを測り、歪んだ楕円形を呈す。深さは約15cmで、浅い皿状を呈する。埋土はオリーブ黒色土である。

この土坑の更に10cm下層で3条の小溝と半円形に廻るピットを検出している。遺物が出土していないので時期は不明であるが、中期のものと推定される（弥生時代第3面）。



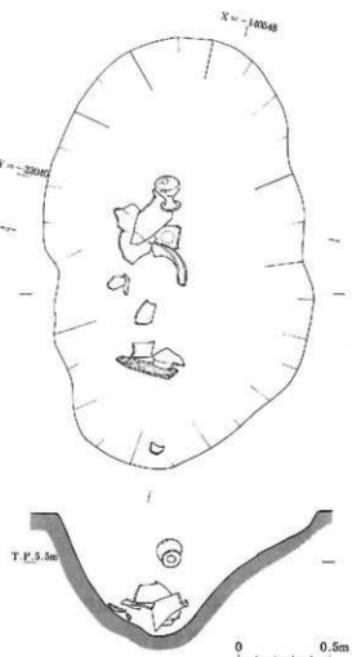
第30図 353-SK(北部) 平断面図

353-SK

第1号方形周溝墓の下層、X = -147557、Y = -33056付近で検出した溝状の遺構である。最大幅2m、深さ50cmを測る。弥生時代中期以前に流れている河道の砂層を掘削して造られており、砂を掘っているためか、断面は捕鉢形を呈する。西側は講堂工事で削平されている。中層から中期前半から中頃の土器を検出している。

357-SK

327-SDの底部、X = -140548、Y = -33040ラインで検出した土坑である。歪な椭円形を呈し、長径2.35m、短径1.4m、深さ0.7mを測る。東肩の最上層から鳥型木製品が出土している。頭から尾までの長さ12cmの小型の鳥で、腹部に棹を突き刺すためと見られる抉りがある。材質は榧である。当遺跡では、四條畷保健所の調査で、第1号方形周溝墓周溝からノグルミ材の鳥形木製品が出土しており、2例目となる。中層からは、完形の小型壺と大型壺の破片、鋤身片等が出土している。掘り形はU字形で、埋土は上層が黒色粘土、下層は



第31図 357-SK 平断面図

黒色粘土と灰白色砂が縞状に互層堆積する。

332-SR

調査区の北端、Y = -33043～-33053で検出した中期の河道である。層序で断面図を掲載したが平面図は割愛した。南肩の一部が調査範囲にかかっただけであるが、幅2.5m、深さ1.5m以上を測る。検出面から1m下の河道中層で中期の土器が出土している。後期には充填され、肩部に328-SKが形成される。

上記の遺構の他、025-SDの南側、X = -140552、Y = -33075付近でもピット、土坑を検出している。黄灰色砂質土をベースとした幅4m程度の範囲に限られている。遺物が出土していないため時期は不明であるが、中期中頃以前の遺構である。

弥生時代中期以前の遺構

中期以前の遺構としては、河道を2条以上検出している。河道は東から南西か西方向に蛇行しながら地山を削っている。深さは2m前後を測る。堆積土は灰白色か黄灰色砂疊層で遺物は出土していない。

第4節 小結

雁屋遺跡では、大阪府教委が四条畷高校で4回、四条畷市教委が四条畷高校の西に位置する、遺跡発見の端緒となった道路公団宿舎、北側の駿生会病院や四条畷保健所の他、民間の開発や埋管に伴って発掘調査や立会調査を実施している。今回は整理の都合で遺構と一部の土器しか掲載することしかできなかったが、簡単に纏めておきたい。

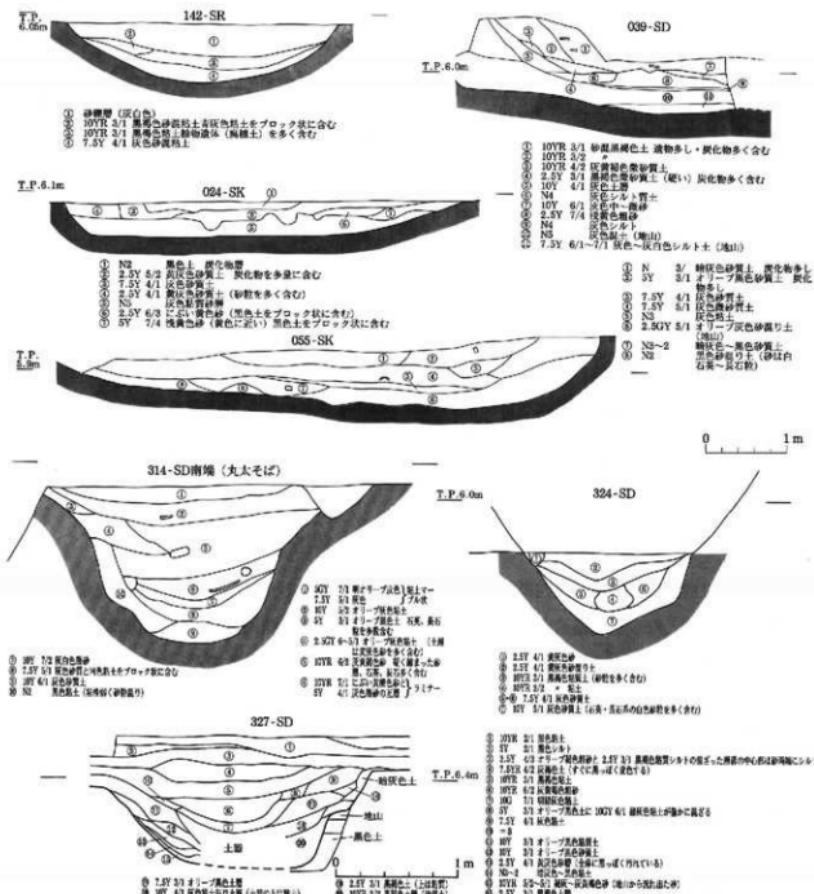
弥生時代中期以前

今回の調査で、最も古い遺構は、調査区内を蛇行して東西に流れる河道である。幅3～5m、深さ2m以上を測る。白色砂が一気に埋積しており、時期は不明である。四条畷高校の西約200mで弥生時代前期中頃の遺構・遺物が検出されているが、高校内では遺物が出土していないのでこの時期の集落は河内潟の汀線に近い微高地の比較的狭い範囲に限定されよう。

弥生時代中期

今回の調査では中期初め～中頃の遺構を、第1号方形周溝墓下層と314-SDの南側(X = -140567付近)で検出している。

中期中頃以後に、その上に築造される方形周溝墓を2基検出した。雁屋遺跡では、駿高校東館や駿生会病院、四条畷保健所の調査でも方形周溝墓が検出されており、旧河内街道(四条畷停車場線)に沿って、南北に方形周溝墓群が広がっている。その築造方法として、駿生会病院の調査では、まず地形に従って、東西方向に溝を掘り、その後、各溝を繋ぐように南北方向に溝を掘って、方形の区画を作り出すことが明らかとなっている。86年度調査で検出された方形周溝も歪で



第32図 檢出清掃断面図

はあるが、南西方向に並ぶ企画性を窺うことができる。今回の調査では第1号方形周溝墓(南溝(314-SD)は講堂建築時に大きく搅乱されているが、溝底は第2号方形周溝墓の手前ではほぼ直角に南に曲がっており、すでに2号方形周溝墓が築造されていたため、溝を南に曲げたと考えられる。314-SDでは土留め用と見られる径10cm前後の丸太を3段に積み重ねた施設も検出されており、周溝墓を区画すると共に利水を目的とした溝であったことも考えられる。

この他、鳥形木製品が出土した357-SK、その上層の327-SDも中期の遺構である。327-SDで検出した壺と鉢は土器棺の溝内埋葬とみられ、この溝も周溝墓の可能性をもつが、古墳時代の

河に削られている。

中期の遺構は、調査区東半分に多く、Y = -33056ラインより西では025-SD南側の微高地（洪水砂）で検出ただけで、その南は粘土層が広がっていた。86年度、93年度、95年度の調査でも中期の遺構は、土器棺を除いて確認されていない。しかし、学校の西に隣接する公園では方形周溝墓が検出されている（野島稔氏に教示を得た）。学校運動場の調査はトレンチ調査であり、運動場にも方形周溝墓の存在することも予想される。

学校の北に隣接する駿生会病院でも方形周溝墓群が繋がっているが、北250mの保健所では中期の住居が9棟検出されている。この時期は保健所付近が集落の中心部となり、南側に墓域が広がっていたと考えられる。

後期

遺物の大半はこの時期のものであり、調査区全体に広がっているが、西地区に多い。西接する95年度調査区でも10棟の竪穴住居や井戸等が検出されており集落の住居域の一画を占めていたのであろう。

駿生会病院や、保健所の調査でも中期の周溝墓の上で後期の遺構が検出されており、今回検出した第1号方形周溝墓の上はこの時期の遺構が古墳時代以降攪拌されてた可能性が高い。

86年度の調査で指摘されているが、今回の調査でも中期の溝（周溝）が後期にも利用されていることが注意される（314、327-SD）。2溝共に断面観察では中期と後期の層の間が不整合であることから、浅く凌譲して再利用されたようである。

溝や不定型な土坑から多くの土器を検出している。100-SDや025-SD、002-SDのように土器の出土状態には一括性があり、完形のものも多いことから祭祀の存在を想定できよう。

古墳時代以後

3条の河川を検出している。312-SR、313-SRでは杭列や簡単な堰と見られる簡単な施設も検出しており、耕作地化されていたと考えられる。河川内は古墳時代後期遺構の土器が多く混入しており、古墳時代以降灌漑技術の向上により、耕地が河内潟傍の低湿地から扇状地上に拡大し、集落は更に扇状地の高所に移動したと考えられる。

報告書抄録

ふりがな	かりやいせき はっくつちょうさがいようⅢ							
書名	雁屋遺跡発掘調査概要Ⅲ							
副書名	府立四条畷高校理科棟(仮称)建築に伴う発掘調査							
卷次	3							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	阿部幸一							
編集機関	大阪府教育委員会							
所在地	〒540-8571 大阪市中央区大手前2丁目 ☎06-6941-0351							
発行年月日	1999年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 °°'	東経 °°'	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因	
かりやいせき 雁屋遺跡	大阪府 四条畷市 雁屋北町 1丁目	27229	18	34° 44' 3"	135° 38' 22"	1997年5月31日 ~ 1998年9月30日	約1500m ²	府立四条畷高校校舎建替え
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
雁屋遺跡	集落 墓地	弥生時代 中期 ~ 後期 古墳 ~ 奈良時代	縦穴住居1 (後期) 方形周溝墓2 (中期) 土坑、溝 河川	弥生土器 (中期・後期) 銅鏡、石鏡 木製品 (鋤、鳥形木) 製品	鳥形木製品は当遺跡では2例目			

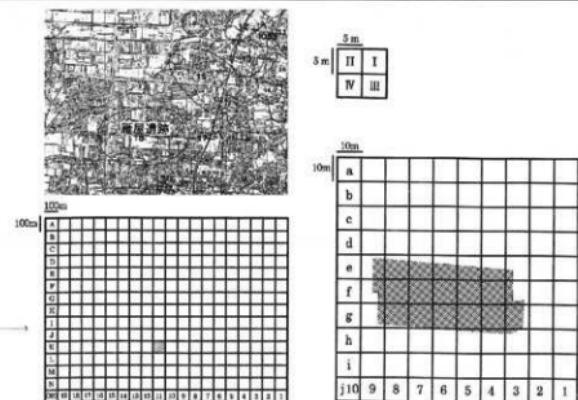
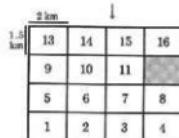
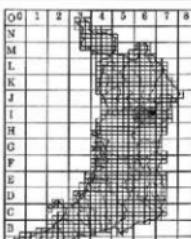
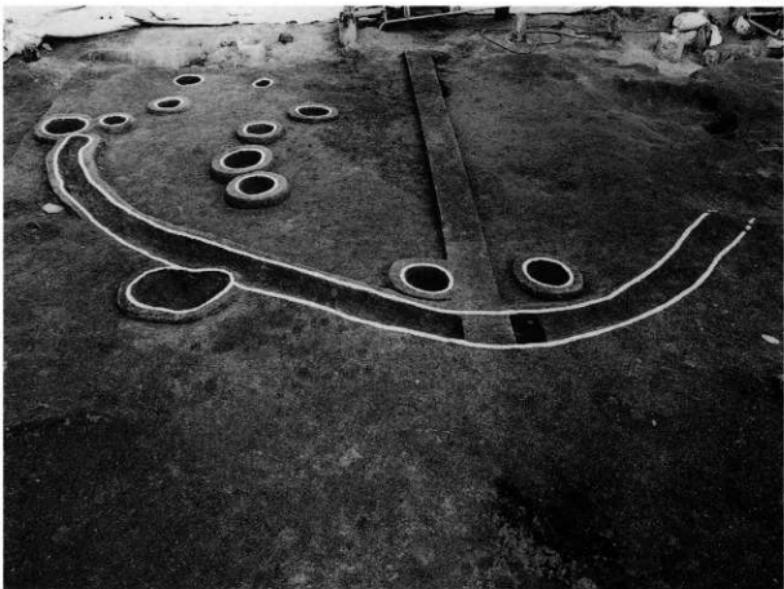


図 版



SB-1 西から



044-SK (SB-1 炉跡) 南から

西地区全景

図版2



東から



南から



西地区全景 西から



025-SD 完成時 西から



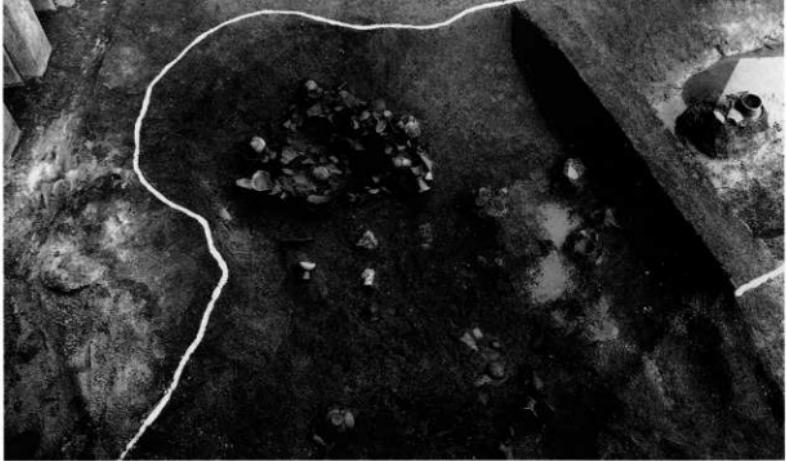
025-SD 北部



025-SD 中央

图版5

025-SD
土器窑
中层全景



中层扩大



下层





149-SP



035-SK



100-SD 北から



100-SD (東から)

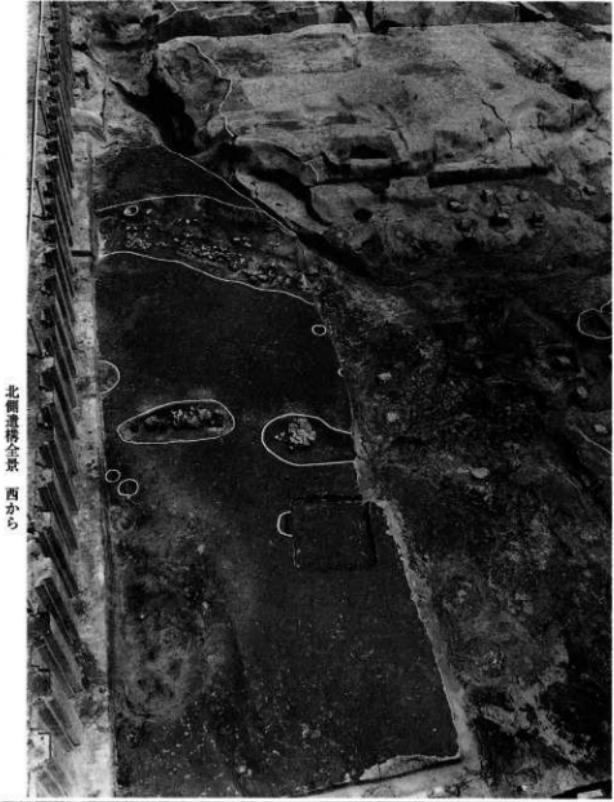


310-SR (第2号方形周溝墓上面) 西から



312-SR 西から

図版9



327-SD

図版10



327-SD 上層



下層



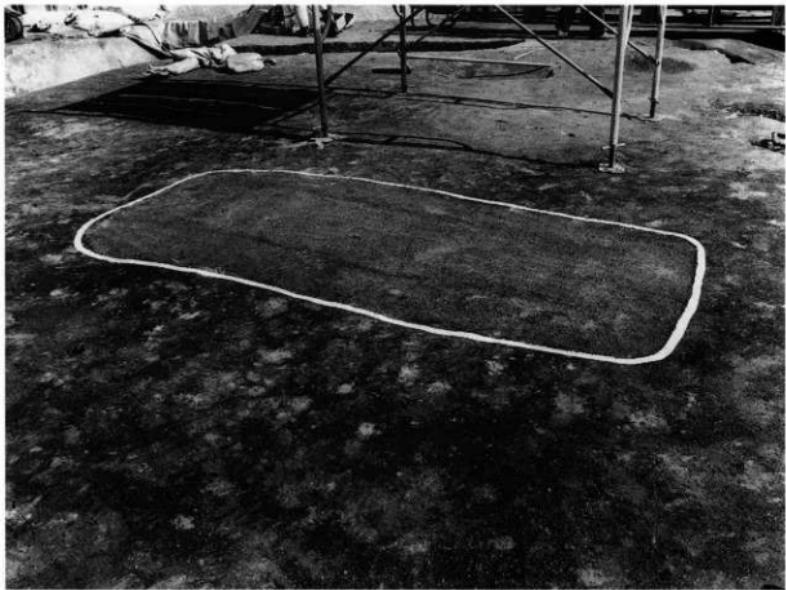
313-SR・314-SD (南から)



315-SD (北から)

第1号方形周溝墓

国版12



第1号方形周溝墓 1号主体



1号主体と地山面の遺構全景



315-SD 斷面



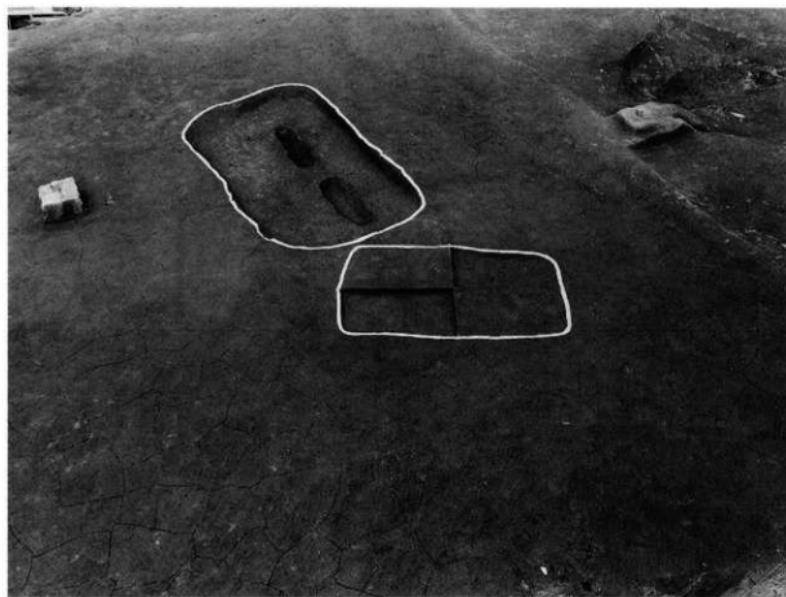
314-SD 断面

第2号方形周溝墓

図版14



全 景 西から



2号主体部検出時 西から



南周溝（324-SD・南から）



北周溝（326-SD・東から）



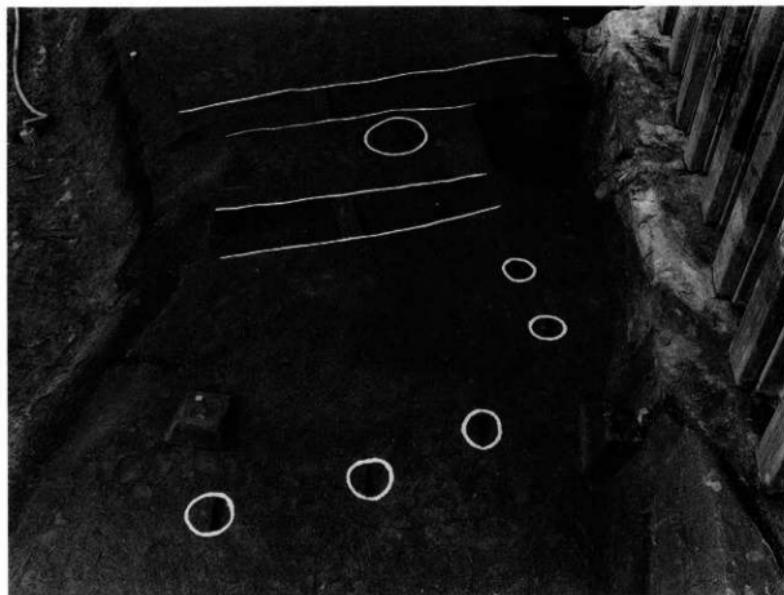
鳥形木製品出土状況 東から



全 景 南から



343-SD (北から)



314-SD南側
第3面の遺構

